第三節　航空部隊の作戰

ビルマ方面陸軍航空部隊は大東亞戰爭勃發するや、直ちにタイ・ビルマ國境から出擊して、十二月十一、十三兩日敵の機先を制してタヴォイ、マグイ、ヴィクトリア・ポイントなど、タイ國國境に近い敵の前進飛行場を攻擊し、ビルマ空軍の出擊企圖を粉碎したが、本格的ビルマのわが空の作戰は十二月二十三、二十五の兩日にわたるラングーン大空襲にはじまつたのである。すなはちこの兩日早くも敵機九十機以上を擊墜破し、集結中の敵空軍主力を覆滅した。その後一月中はモールメン、ラングーン飛行場群、二月にはひるやバッセインをも連續攻擊し、ラングーン陷落に至るまでミンガラドン飛行場だけでも攻擊回數は三十九回に達した。

ラングーン陷落後、北上を開始した地上兵團に呼應した陸鷲は、ビルマ縱貫鐵道に沿つて、敗敵の捕捉連爆を行つたが、三月二十一日以後更に新作戰を開始して、四月初旬に至るまでインド方面からの增援敵空軍の根據地であるアキャブ、マグウェの飛行場およびその前進基地タ

ウンギー飛行場群を連續的に强襲し、この間百二十六機を擊墜破して殘存ビルマ空軍の大部を擊滅した。

次いで四月にはひるや、雄渾なる地上作戰の進展に從つてピンマナ、マグウェ以北の中部ビルマの敵車輛、陣地などに對して痛快な攻擊作戰をなし、さらに緬・支國境にあつて重慶空軍所屬のアメリカ義勇軍前進基地としての三つの飛行場を擁してゲリラ戰を試みてゐたローウィンに對しても數回にわたつて進攻し、これを沈默させた。マンダレイ陷落以後の大詰めに至るや、すでに刄向ふ敵なきわが荒鷲は、大包圍環內および周邊に逃げまどふ敵部隊に對し完膚なきまでの銃爆擊を加へたほか、五月八日には遠くインド・ビルマ國境を越えて東部インド、ベンガル灣のチッタゴン飛行場に初めての爆彈を見舞つたのである。

＊　＊　＊

ビルマの空を蔽ふこの空の大作戰こそは、空前の大戰果とともに、大東亞戰史に特記さるべき大航空作戰であつた。

開始以來五ケ月間の五月十一日までの綜合戰果は次の如くである。

一、敵飛行場攻撃延回數　百二十六回
二、撃墜破飛行機　五百五十四機
三、撃破せる自動車ならびに自動貨車　千二百十三輛
四、撃破せる戰車ならびに裝甲車　三百三十三輛
五、撃破せる鐵道車輛　千五百四十三輛および百十五列車
六、撃沈破せる船舶　九十二隻
七、爆破せる敵軍事施設　六百六十ケ所

＊　＊　＊

いま、この空の大作戰を身をもつて戰つたビルマ方面陸軍航空部隊の〇〇部隊長の談を中心に、『ビルマ航空作戰』の全貌を記してみる。

一　敵空軍の編成狀況

ビルマ方面の敵空軍は開戰當初までは大したものでなかつたが、日・米英間の情勢逼迫につ

れて、逐次インドおよび支那から增派された模樣で、その內容もイギリス軍と重慶軍の二つから成つてゐた。しかし重慶軍といつてもアメリカ軍の義勇軍から成つてゐるもので、これらは重慶軍のマークこそつけてゐたが、アメリカ製の飛行機で、重慶、昆明などで相當に訓練した比較的優秀な連中が乘つてゐた。

これらが聯合してラングーン北部のミンガラドン飛行場を根據としてゐたが、兩軍は別々に行動してゐて、同時に協同の攻撃をするといふやうなことは減多になかつたのである。

また飛行機の內容は元來が防禦に主眼をおいてゐたため戰鬪機が多く、ほとんど戰鬪機隊で爆撃機の數は割合少ない。これがため戰のやり方も大兵力をもつて敵中に進攻して、わが軍の飛行機を徹底的にやつつけるとか、集結中の軍隊をやつつけるといふやうな大規模な行動はやらず、せいぜい國境附近の割合近い所にあるわが飛行場または第一線部隊に爆撃をやるくらゐのもので、それも多數の編隊を組んで襲ひかかるのでなく、全くのゲリラ戰法で、例へば月明を利してのバンコック爆撃が三、四回あつたが、大體三機あるひは四機程度で盲爆しては引揚げてゆくといつた消極的戰法だつた。

しかし首都ラングーンの防空といふことは非常に眞劍で、ミンガラドン飛行場附近では、はじめのころは百機近い敵機が相當ねばり强く空中戰鬪をやり、殊に爆擊機に對しては執拗な攻擊をやつて來たし、防空監視隊、航空情報隊などもあつて、わが軍の進攻はよく監視してゐたらしい。

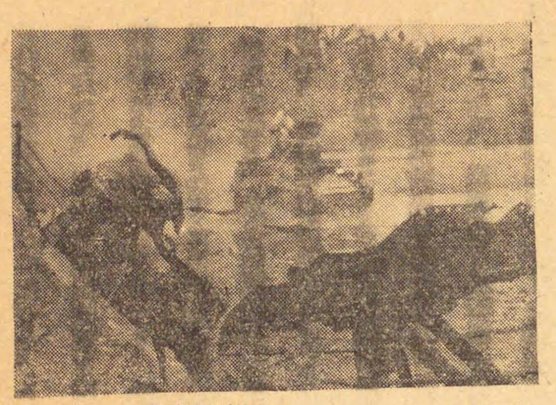
二　大空の作戰

ビルマ航空作戰は進駐地であるタイ國から生み出された。しかしタイではスパイには實に惱まされた。タイ國は最近までイギリスの勢力下にあつたので、X二十七號といつたスパイなども相當活躍してゐた。

バンコックが夜間襲擊されると、わが荒鷲の駐屯してゐる宿舍の附近に妙な赤い信號があがつたりした。わが軍の飛行機が舞ひあがればすぐ短波無線で知らせ、目的地上空に到着した時はもう飛びあがつて待機してゐるといつた狀況だつた。

嚴重取締り方を要求したが、まだタイ國は警察力が十分でなく、徹底的防諜は不可能だつた。

それにビルマの敵空軍は、マレーやフィリッピン等と違つて方々たくさんの飛行場を持つてゐるうへに、こちらで出擊して叩くとすぐ隱れてしまふ。しばらくはその飛行場にゐないが、また重慶とか昆明あるひはインド方面からたりなくなつただけ增派して來る。戰線が地續きなだけに實に執拗で、ちやうど蠅を追ふのと同じやうであつた。いくら徹底的に叩いても十日もすると大體もとどほりになつてゐるので、どうしても根ッ子を刈り取る必要があつたのである。



鹵獲戰車で
猛追する皇軍精鋭

はじめわが軍はこの方面にごく一部の兵力を持つてゐただけだつたが、マニラ陷落によつてこの方面の兵力を增强することができたので、新たな航空作戰を展開することになつたのである。

飯田中將の指揮する地上部隊は一月二十日を期して逐次國境を越えてビルマに進入した。わが航空部隊は

これに協力することになつた。そのためにまづラングーン附近に集結した敵空軍主力に大打撃をあたへて、ビルマの制空權を獲得し、同時に主力をもつて地上進擊部隊に直接協力——地上部隊のための偵察をやつたり、敵戰鬪機を追拂つたり、前面の敵を爆擊したりする——をするといふ方針をたてたのであつた。

前述の通り、敵は戰鬪機が大部分であり、更にタイ國內のスパイ網と國境の嚴密な監視隊の通報で、わが軍が出動すればもう敵機は舞ひあがつてしまひ、爆擊する目標がない。ぐづぐづしてゐればこちらの大きな爆擊機が敵戰鬪機の餌になる恐れもある。どうしてもわが戰鬪機をもつて敵の戰鬪機を擊墜しなければならない。

かうして、戰鬪機と爆擊機が協同する大空襲作戰が生れ、かの十二月二十三、二十五の兩日にわたる三回のラングーン爆擊が決行されたわけである。しかし、戰爆協同は戰鬪機が上を行き、爆擊機は下を飛行するのが原則であるが、相手は戰鬪機が多く、しかも上空で待機してゐる。そこへ突込む爆擊隊はもとより決死ではあるが、これが掩護の戰鬪隊も猛烈な空中格鬪をやらなければならなかつた。荒鷲は空中に散つてゆくためにのみ育まれたものではない。

戰鬪機に後顧の憂ひなく格鬪できるやうに、晝間は戰鬪機隊だけで攻擊し、爆擊機隊は夜間に猛爆をおこなふことになつた。

夜間爆擊は月明を利して行かないと效果がうすい。しかし天はわれに幸をあたへた。炎天を征く地上部隊には相當こたへたらうが、ビルマの氣候はこの頃快晴續きで、しかも月は非常に明るく、向ふの八日が日本內地の十五夜くらゐの明るさであり、戰果は相當あがつたのであつた。

はじめは盛んに空中戰もやり多數の戰鬪機を擊墜したが、そのうち敵もわが軍の作戰を知つて、その裏を搔いてわが戰鬪機隊が襲ふと逃げてしまふ。仕方がないから基地に歸ると、そのあとからこつそり尾行して來て背後に迫る。歸る時はわが軍の飛行機にはガソリンも澤山ない。敵は自國領內だから歸る距離も考へる必要なく、しつこくいどみかかつたりしたものであつた。

三　緒戰の大戰果

十二月の三回にわたるラングーン大空襲は本章冒頭に述べた通りであるが、わが荒鷲は再び一月二十三、四の兩日主力を擧げてラングーン市とミンガラドン飛行場を襲つたのである。

わが空襲部隊は、終始敢闘する『直接攻擊隊』と、如何なる場合でも爆擊機と同行する『爆擊機掩護戰闘隊』と、『爆擊機隊』の三段構へであつた。

まづ直接攻擊隊が二十三日午前ラングーン上空に待機してゐたホーカー・ハリケーン、カーチスP四〇型、バッファロー、スピット・ファイアーなどの戰闘機群と格闘し、これらを奔命に疲れさせたのち、午後には爆擊機をともなひ、殘存敵戰闘機の攻擊を冒して飛行場や軍事施設を猛爆したのであつて、二十四日も大體そんな具合で、兩日を通じて我が方にも若干の損害はあつたが、擊墜四十數機、地上擊破七機の大戰果を收めた。

敵の戰闘機は火力裝備が非常に優秀で、同時發彈の銃が八つもある。P四〇型は機關砲までついてゐて、彈は簾のやうに飛んで來るものだつたが、わが三段構への戰術に眩惑され、わが

猛爆はラングーン市内の隨所に火災を生ぜしめたのである。

四　第一次航空作戰

二十三、四兩日の攻擊に敵空軍は相當な損害を蒙つたが、二十六日頃には敵兵力がまた增加してしまつた。當時ラングーンの敵空軍は四十機乃至五十機であつたが、多い時は百機近くも集つてゐた。わが地上進擊部隊はすでに國境の山岳地帶を突破して、モールメンに迫つてゐたが、敵はこれに對し二機または三機の戰闘機を繰出して機銃掃射をしてくる。どうしてもこれを叩きつけなければならなかつた。

そして一月二十六日から同三十一日まで、第一次航空作戰が開始されたのである。

二十六日の惡天候を衝いてのラングーン大夜襲を皮切りに、晝は戰闘機、夜は爆擊機といふ戰法で、ラングーンおよびミンガラドン飛行場の攻擊を反復した。夜間爆擊は大編隊ではやれないので、三機乃至六機が時間を限つて十分、二十分おきにやり、滑走路にずらりと並ぶ敵飛行機をみごとに爆破炎上させた。

この第一次航空作戰では兵營その他の軍事施設は相當やつたが、確實なもの十九機、炎上したもの大型一機以上はわからなかつた。しかしミンガラドン飛行場を攻略してから、その當時の敵の報告などを捕虜に訊してみたところ、相當の戰果があつたことが判明した。

敵は晝と夜と飛行機を置く位置を變へて安心してゐたのだが、わが荒鷲はちやんと間違はず爆擊する。夜になつてから隱しても駄目であつた。そこでビルマ人にスパイがゐるに違ひないと、飛行場附近に住んでゐたビルマ人を全部監獄に放り込んだなどといふ笑ひ話もあとで判つた。

この頃ちやうど地上部隊の主力も國境を越えて前進してゐたので、この擊滅戰が終ると、荒鷲はすぐに全力を擧げて地上戰鬪に協力した。ジャングル地帶の錯雜した地形にともすれば迷ひがちの進擊部隊は、偵察機の荒鷲の誘導でどれだけ救はれ、元氣づけられたか知れなかつたのである。

五　第二次航空作戰

次に第二次航空作戰が二月三日から十二日までの十日間に亙つて實施された。第一次作戰で叩かれた敵が又もや擡頭してきたからであつた。

三日から七日に至る五日間ラングーン周邊飛行場群の反復爆擊がこれだつた。

敵はミンガラドンの危險を悟り、その附近のレグ、マウビンなどに飛行機を分散配置してわが軍の爆擊機とか戰鬪機とかの攻擊を避けてゐたので、戰鬪機による擊墜は九機、爆擊隊の爆破は二十機であつた。

八日から十二日までの五日間は、大體一部をもつて航空擊滅戰に充て敵飛行機を監視または攻擊し、主力は地上部隊に協力して、マルタバンの爆擊ならびにシッタン河渡河を掩護したのであつた。

十三日から十八日まで次の航空作戰の準備に移つた。整備と同時に夜間の猛訓練もやつた。これまでわが航空部隊はフィリッピン作戰もやつたり、タイ國に基地を前進させたり連續作戰のため相當機體も損傷し、燃料、彈藥の補給も必要だつた。それにわが空軍先遣は未だ激戰の餘燼消えぬタヴォイやモールメンの敵飛行場に早くも挺身してゐたのである。

六　第三次航空作戰

二月十九日から二十八日まで十日間が第三次航空作戰だつたが、當時は敵の戰鬪機がまたしても增加してきたのに反して、わが軍の戰鬪機は機材的に疲れてきたので、機體の手入れを逐次やらなければならない。その間敵にやつて來られてはうるさい。そこでふえてきた敵を何とか誘き出してある程度の敵機を粉碎し、最後に思ひきり叩きつけ、同時にビルマ・ルートの爆擊もやらうといふのであつた。

十九日から二十三日までの五日間、マンダレイ、ピンマナ、トーングーの各停車場の列車を爆擊して大戰果をあげたが、一方敵空軍はミンガラドン、レグ、バッセインなどイラワディ西岸の各基地にゐたので、二十五日以後猛攻擊を繰返し、七十九機といふ大量擊墜破の記錄を殘した。地上擊破の中には大型のものも相當あり、こいつが夜でも出てくれば、地上部隊も相當傷められたかも知れなかつた。

殊にミンガラドン攻擊の爆擊隊はガッチリと編隊を組んで白晝堂々と飛行場に襲ひかかり、

記錄破りの低空飛行を決行したのである。この固いスクラムから出る彈網には敵戰鬪機も近づく術がなく、近づいたものは擊墜された。

戰鬪隊も勇敢であつた。ある戰鬪機は敵彈を受け、火を發し戰鬪不能に陷つた。荒鷲は從容として自爆を決意したが、ただ自爆するのは勿體ないとばかり、急降下しながら飛行場の敵整備員に猛射を浴びせたうへ、敵飛行機の掩體の中に突込んで、敵の飛行機に機をぶつつけた。敵の飛行機の中にめり込んで火焰の中に敵機と無理心中をしたのである。

あとでわかつたのだが、餘りの勇敢さに敵も感嘆して、厚くその荒鷲を葬つたといふ。

名偵察隊長の死　しかしこの第三次の作戰中、わが航空部隊は重大な損失を蒙つた。それは作戰開始以來部隊の目となつて活躍を續けてゐた名偵察中隊長大平忠夫大尉が、二十二日シッタン河上に壯烈な戰死を遂げたことであつた。

爆擊機隊、戰鬪機隊は時々整備をやり、休息をする暇もあるが、偵察隊は絕えず敵の動きを知つてゐなければならぬ關係からほとんど休養の暇がない。しかも攻擊部隊の華々しさに比して地味な、緣の下の力持といつた仕事である。おまけに偵察機は速力こそ早いが武裝がほとん

どない。速力の早い偵察機で地上偵察をするのは想像以上に困難である。汽車に乘つて枕木の數を算へられぬと同じやうに、地上の自動車の五臺や十臺は、それも迷彩してあるのだからなかなか見つからない。

わが航空作戰が至るところで大戰果をあげ、敵の捕捉殲滅を完成しつつあつた蔭には、大平大尉以下の偵察隊の血のにじむやうな情報蒐集があつたのである。

二月二十二日、ラングーン攻略を前にして、わが軍は敵が北方マンダレイ方面に退却するか、南方ラングーン方面に逃げ込むかの判斷について迷つてゐた。主力をどの方面に向けるかの、作戰指導上の重大な時機であつた。この重大偵察の任務が大平部隊にくだつたのである。

ちやうど部隊には速度の遲い偵察機が新らしく一機到着したところであつた。大平大尉は雀躍りして喜んだ。部下が『危險ですから速い方で』といふのを『これでなくちあ偵察はよくできん』と聽き容れなかつた。『それではせめて編隊で……』といつても、『大丈夫』の一言を殘してシッタン河上空に消えて行つた。地上では敵味方相對峙してゐた。

思ひ切つた低空で敵彈の中を掻い潛つて偵察した大尉は、無電で敵情をつぶさに連絡したが

無念敵地上砲火を浴びて後ろに坐した搭乘者もろとも、敵陣に向つて壯烈な自爆を遂げたのであつた。

しかし大尉の死は無駄でなかつた。敵の退却方向を知つた皇軍は猛然起つて追擊戰に移つたのである。

大平大尉の拔群の功績に對し、ビルマ方面陸軍航空部隊最高指揮官は三月十日集團として第一回の感狀を授與したが、畏くも上聞に達し、大尉の偉勳はビルマ戰線の華として無上の光榮に輝いたのである。

七　壯絕！　對戰車戰鬪

三月にはひつて地上部隊はサルウィーン河からシッタン河の線に躍進してゐた。荒鷲も逐次これに協力して爆擊をおこなつた。この作戰が終つて、爆擊隊は今度は敵據點を爆擊し、偵察隊は地上部隊と連絡する任務を果すことにあつた。大體豫定通り作戰が進み、三月八日地上部隊はラングーンに突入したのである。はじめの判斷では敵はあまり戰車を持つてゐないといふ

判斷をしてゐた――事實これまでの戰鬪で大戰車群は出現してゐなかつた――、ところが突入に當つて敵は澤山の戰車で反擊して來た。わが軍は嶮阻な惡路を越えて進擊して來たのであるから、當時あまり機械化部隊を持つてゆけなかつた。

結局步兵部隊で攻擊するほか仕方がなかつた。ペグー附近では敵は三日間も頑張り、平地に穴をあけて村落と村落をつなぎ、堅固な煉瓦造りの壕を作つてこれに匿れて抵抗した。この戰車群に對しわが荒鷲は戰ひをいどんだのである。イギリスはさすが戰車の家元だけあつて相當裝甲が厚く、對戰車砲ぐらゐではなかなか思ふ通りゆかなかつたが、爆彈には勝てなかつた。顚覆するのがよく見えた。航空部隊の對戰車戰鬪に對する威力は、地上部隊も感激して、飛行機の翼の蔭に敵に肉薄するといつた調子であつた。

ペグーの街は完全な建物がなくなつたほど爆彈の洗禮を受けた。

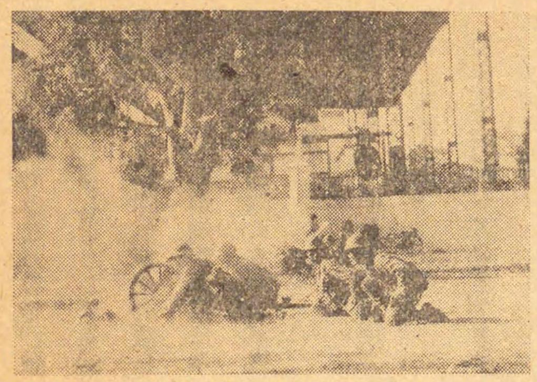
マグウェの擊滅戰

ラングーン攻略前から敵の飛行機が何處かへ匿されて、果して何處なのか判らなかつたが、

圖らずもイラワディ上流のイェナンヂョーン油田地帶を偵察に行つた偵察機がマグウェにミンガラドンに劣らぬ立派な飛行場があるのを發見した。

敵はこの邊一帶の油田地帶防禦のために相當前から祕密につくつてゐたものに違ひなく、設備萬端なかなか立派なもので、これこそ彼等の匿れ家だつた。彼等は日本人とは違つてあまり設備のよくない飛行場にはゐたがらないらしい。わが荒鷲連のやうに飛行場野天で飯盒の飯を食ふといふやうな戰爭はできぬらしい。

一方地上部隊はラングーン攻略後引續いて北上作戰を進めてゐた。この間航空部隊は、開戰以來の間斷なき活躍で相當傷んでゐた機體と兵員の整備休養をやつた。燃料は幸ひラングーンに澤山敵が殘して行つてくれたが、爆彈がない。當時はまだアンダマン海の制海



ペグーを猛攻中の
わが〇砲隊の勇士

權が確保されてゐないので、海上輸送は困難であつたし、陸路もなかなか思ふやうには迅速にゆかない。しかしどうしても爆彈は入手しなければならなかつた。そこで思ひ切つて〇〇機を輸送機として爆彈運びを決意したのである。

これによりわが航空部隊はみごと多量の爆彈をラングーンに運んだ。

同時に航空部隊にも新手が增援された。この大部隊でいよいよ大詰の決戰をやることになつたのである。

敵はマグウェに七十機乃至九十機の戰鬪機隊と二、三十機の爆擊機隊、それにアキャブ附近にも相當あつた。

わが地上部隊はアンダマン海からラングーンに續々增派されつつあつた。この上陸新鋭部隊をこれらの敵空軍から護るためには、どうしても徹底的打擊をあたへて、敵の輸送船團襲擊の企圖を封じなければならなかつた。それには敵をかためて、今度こそ本當に潰滅させなければならなかつた。

だからわが航空部隊はマグウェ發見後もその偵察さへ禁じて知らぬ顏をしてゐた。そして極

祕裡に作戰準備を進めた。果して彼等はマグウェに安心して集結してゐた。

三月二十一日を期して荒鷲は一齊に蹶起、二十二、二十三の三日間猛烈な航空擊滅戰をやつた。敵は全くわが良にかかつた。大膽なしかし確實な晝間奇襲だつた。わが荒鷲は晝食を十分食つて出動したが、ビルマ時間は二時間四十分遲れてゐるので彼等はちやうど晝飯時だつた。

戰爆協同の第一回大編隊はマグウェを大混亂に陷れ、一時間遲れて第二回の爆擊隊が襲擊、二十二日の拂曉、今度は寢込みを襲つての第三回襲擊、午後四時には第四回爆擊といふ具合でこの四回の爆擊だけで敵機七十九機を爆破、おまけに無線、倉庫、燃料等の施設までほとんど何から何まで全滅してしまつたのである。

この時こそ奇襲中の奇襲で、敵機で舞上つて來たのはわづか二、三機程度で、爆擊機に隨つて行つた戰鬪機など手持無沙汰で爆擊機より先に銃擊を浴びせてやつと溜飲を下げたほどだつた。

この方面で生き殘つた運のよい飛行機とインド方面から來た空軍がアキャブにゐるはずなので二十三、四兩日これを襲つたが、もう逃げてしまつてほとんど殘つてゐなかつた。

マグウェ、アキャブの兩擊滅戰で、確實なものだけで百七機を擊墜破し、不確實なもの五機のほか大型機若干といふ大戰果を記錄したのであつた。

空の報道戰士散る　全世界に報道されたマグウェの大戰果の蔭にまた一人の報道戰士が散つて行つた。

前進基地ミンガラドンは毎日百三十度の炎熱に木蔭一つない。マグウェその他連日の爆擊行にカメラと鉛筆をもつて荒鷲とともに空を征く朝日新聞社特派員安田晃君の姿はどんなにか航空隊員を奮起させてゐたか。しかし『よき記事を國民に』と若い闘志を燃え立たせてゐる安田君も連日の疲勞にだんだん衰弱して行つた。四月八日航空部隊本部へ足を運んでゐた時、遂ひに安田君は燒けた飛行場の中に昏倒してしまつたのであつた。

直ちに附近の救護所へ收容した。午後七時斜陽を浴びて歸還して來た機の爆音に瞬間目を見開いた。しかしそれが同君の最後であつた。航空記者にふさはしい美しい死であつた。

九　ビルマに敵機なし

かくてビルマの敵空軍は大體擊滅され、更に地上部隊の雄渾な大殲滅戰の進展とともに敵空軍基地は相次いで占領された。

航空擊滅戰は終つた。航空擊滅戰は日本ではこの作戰がはじめてで、また世界としてもこれだけ廣い地域に亙つて一貫した作戰をおこなつて成功したことは、いまだかつてその戰史にもない。

氣魄の勝利でもあつたのである。敵の飛行場への距離その他の悪い條件を克服して、敵上空に突入する。喰ふか喰はれるかの數十分の空中戰を支配するものは第一にやはり氣魄である。防禦のために攻擊をしたわが空軍は、防禦のために防禦をした敵空軍を壓倒した。地上部隊は絶對に航空部隊の掩護と防禦がなければならない。そして同時に航空部隊の攻擊精神を培つてくれるものは、地上部隊のたゆまざる敢闘である。地上から盛り上る皇軍の氣魄は空飛ぶ荒鷲の心にも通ずるものであつた。

すでに、ビルマから敵機は姿を消して、わづかにカルカッタ方面から夜間爆擊を、皇軍の占領したアキャブに試みてきたくらゐであつた。このボーイング双發機は沼の中を爆擊したため

に、可愛想に魚がみな浮いて皇軍勇士の食膳をにぎはしたくらゐのものだつた。
また雲南省昆明附近にも敵基地があるが、セイロン島がわが海鷲に叩かれ、チッタゴンさへ爆撃に曝されてゐる彼等は、インド防衛に頭痛鉢巻の形で、ビルマ出撃など困難であらう。

一〇　軍神加藤少將の最期

ビルマの空を蔽つた航空撃滅戰は以上の如く、戰史未曾有の戰果をあげたが、この戰果の蔭に、わが軍はかけがへのない傷手を蒙らなければならなかつた。

帝國陸軍航空部隊の至寶、加藤建夫中佐を炎熱燃ゆるビルマの空に失つたのである。

昭和十二年七月、支那事變勃發するや、加藤少將はただちに北支に出征、爾來四ケ年餘、大陸の空は加藤機の鵬翼を迎へぬところとてなき縱横の活躍ぶりを示したが、昭和十六年十二月八日大東亜の征戰ひとたびおこるや、加藤部隊は佛印フコク島を基地として、友軍青木部隊とともに、山下兵團のマレー上陸部隊の第一次船團掩護といふ空前かつ至難な決死的任務を完遂し、今次南方大作戰の大戰果の礎を築いた。

加藤部隊の活躍については、わが建軍以來かつてなき七つの感狀授與の榮譽によつても明らかで、その武勳は偲びてもあまりあるが、さらに、加藤少將の人となりの高邁なることは、部内はもとより、少將を知る人のすべてが異口同音に讃へるところであり、特にその卓越せる指揮統帥および比類なき技能は、陸軍航空の至寶と謳はれてゐた。

同少將のかがやく戰歷は、すでに七つの感狀にもられてあるが、シンガポール、ジャワ、スマトラ方面の作戰が一段落するや、加藤部隊は反轉して、主力をもつてタイ國に前進、昭和十六年十二月二十五日ラングーン大爆撃に參加して以來、たえて訪れなかつたビルマの空に、ふたたびその鵬翼をあらはしたのである。

三月二十五日早朝、偵察機の報告によりローウィン飛行場に敵機集結すとの報に接するや、ただちに出動して、四機を撃破、四月十日ふたたび進攻して十四機を撃破し、さらに休息する暇も惜しみ、同日午後出動、殘存敵機トマホーク六機と交戰、その二機を撃墜、この矢繼早やの奇襲强襲により、在ビルマのアメリカ義勇隊の主力を潰滅せしめたのである。わが地上部隊の猛撃に敵空軍アキャブに進出せりとの報に、四月五日加藤部隊長は〇〇機をもつて超低空に

より同飛行場を奇襲し、所在の敵機を銃撃により破壊炎上せしめ、殘存イギリス空軍をほとんど潰滅せしめた。

皇軍のアキャブ占領後、敵はわが軍による同飛行場の使用をおそれてか執拗に反擊來襲するので、加藤部隊にこれが邀擊の命がくだつた。

當時部隊の空中勤務者は大部分デング熱に冒され、加藤部隊長また病後の日あさく健康十分ではなかつたが、空中勤務者の健康者全員を指揮して五月十六日以後來襲敵機擊墜につとめ、二十一日までにロックヒード三機を擊墜した。

銘記すべき五月二十二日、熱帶の空はあくまで青くすみ、ベンガルの海は濃紺によどんでゐた。その時敵ブレンハイム一機がなにに血迷うたか、アキャブに來襲したのである。

加藤部隊長は報告をうけとると、連日の猛攻に疲れた部下の身をいとうてか、單身愛機に搭乘、敵機を急追した。晴れわたるベンガル灣上に華々しい追擊戰が展開され、加藤機はアキャブ西北約八十キロの海上で、遂ひに敵機を捕捉擊墜したが、この時無念や部隊長の愛機も火を發し、部隊長また敵彈に重傷を負ふてゐた。

加藤機はそのまま紺碧の海中につつこんでしまつた。

＊　＊　＊

かくてこの加藤部隊長に對し、寺內南方方面陸軍最高指揮官より、武人として榮譽この上なき感狀が授與されたが、この旨畏くも上聞に達し、これとともに五月二十二日附を以て二階級進級の恩命を拜したため、奇しくも少將の命日にあたる七月二十二日、陸軍省よりこの旨發表が行はれた。

△陸軍省發表（昭和十七年七月二十二日午後四時）

大東亞戰爭勃發以來戰鬪飛行部隊長として南方各地に轉戰し全戰局の歸趨に至大の貢獻をなせる故陸軍中佐加藤建夫生前の武功に對し曩に南方方面陸軍最高指揮官寺內壽一より感狀を授與せられしが今般畏くも上聞に達せられたり

感狀

陸軍中佐　加藤建夫

右者戰鬪飛行部隊を率ゐ今次作戰に從ふや新裝備の戰鬪機を驅り常に陸軍航空部隊の先鋒となり遍く主要戰場に轉戰し果敢なる攻擊と卓越せる戰技とを以て敵機二百數十を擊墜破し嚮ふ所悉く敵を慴伏せしめ戰局の歸趨に至大の貢獻をなせり、又この間遠距離進攻に將又地上攻擊に戰鬪機部隊の運用上幾多の新境地を開拓せり、部隊の赫々たる功績に關して旣に再度感狀を授與して顯彰するところありしが其の戰功は一に中佐の高邁なる人格と卓越せる指揮統帥及び優秀なる操縱技能に負ふものにして其の存在は實に航空部隊の至寶たりしに遽かに壯烈なる戰死の報に接し痛惜極りなし玆に重ねて感狀を授與して特に拔群なる武功を賞し之を全軍に布告す

昭和十七年五月三十日

南方方面陸軍最高指揮官

伯爵　寺　內　壽　一

＊　＊　＊

まさに空の英雄として國民讃仰の的たりし少將の戰死は全國民の深く痛惜するところであるが、『空の軍神加藤』の偉大なる鬪魂は、一億國民の魂の中に永久に生き、その赫々たる武勳は青史に不滅の光彩をはなつであらう。

第四節　作戰を回顧する

作戰開始以來、半歲、いまやビルマの地に一人の敵兵なく、空には一機の敵機もない。ビルマ戰定は全くなつた。

前述の如く、ビルマ作戰は二つの段階に分けられる。第一段階は開戰以來、首都ラングーン陷落にいたる三月十日までであり、第二段階は、ラングーン陷落後から、ビルマ・支那國境地區およびビルマ・インド國境地區の制壓にいたる五月末までである。

この兩段階を通じての綜合戰果は、次の如きものである。

(一)　交戰兵力は約十五萬であり、他の南方諸作戰フィリッピンの約十萬、マレーの約十二萬、蘭印の同じく十二萬に比し、もつとも多數の敵を相手としたものである。

(二)　擊滅せる兵力は約十三ケ師團、すなはちイギリス第七機械化旅團、その他六ケ大隊、インド第十七師團、第十三師團、六十三旅團、重慶第二十二師團、第二百師團、第九十六師團、第四

十九師團、第五十五師團、第九十三師團、第二十八師團、第二十九師團、第三十八師團、ビルマ第一師團その他約一ケ師團である。

(三)　敵の遺棄死體は總計約二萬五千で、マレー戰線での一萬五千、フィリッピン戰線の一萬二千二百をはるかにしのぎ、俘虜は約四千三百である。

(四)　鹵獲品は、銃器、彈藥類が多く、ことに車輛は八千輛を突破してをり、マレー戰線の十倍餘に達してゐる。

(五)　わが方の尊い損害は、戰死一千二百八十九、戰傷三千百五十六で、いづれもマレー作戰の半數以下であり、これはビルマ作戰の特異性で、後述するやうに酷熱惡病を克服しながらいかにわが將兵が力戰奮鬪したかを物語るもので、敵側の死傷の甚大さとくらべれば、實に僅少であることはいなみ得ない。

結局未曾有の大戰果の一語に盡きるのである。

	第一期	第二期	合計
遺棄死體	五五、〇〇	一九、一〇〇	二四、六〇〇

俘虜	一、九八六	二、三〇二	四、二八八
【鹵獲品】			
火砲	一三九	二八一	四二〇
銃器	四、七四八	六、五〇〇	一一、二四八
砲弾	一、六八〇	一三、一七六	一四、八五六
銃弾	一、三五六、三八二	二、一〇五、九一九	三、四六二、三〇一
戰（裝甲）車	一〇一	三一一	四一二
車輛	一、三二六	六、九二八	八、二五四
【我が損害】			
戰死	四三八	八五一	一、二八九
戰傷	八二六	二、三三〇	三、一五六

このほか、確實に擊墜破した敵機は、全期間を通じて四百五十機、不確實なもの約百十機が加へられる。

一　作戰の特異性

想へば今次の作戰は、實に廣大な地域にわたつた遠距離地上作戰であつた。

東西約九百キロ、南北實に一千九百キロの最長翼を有する六十萬平方キロ餘、わが國土にほぼひとしい地域にわたる大作戰であつた。

作戰の當初、タイ・ビルマ國境の大ジャングルに蔽はれた山々をみ、濁流滔々たるサルウィーンの大河を目前にし、さらに灼熱の太陽を仰ぎみたとき、誰が四ケ月餘の短期間でビルマ全土の戡定といふ戰果を豫想したであらう。

タイ・ビルマ國境のピサンロークからビルマにはひり、マンダレイまで徒步進擊をおこなつた部隊の如きは、青森から下關に至る千數百キロの道を踏破したことになり、かのマレー半島作戰部隊が、シンゴラの上陸地點からジョホール・バルまで千百キロの進擊を行つたのをはるかにしのいでゐる。

しかも、マンダレイから北上することさらに五百キロ、カタまでつつこんだ部隊の如きは優に二千キロ、未曾有の長距離進擊であつた。また、進擊速度についても右翼突破部隊の如きラングーンとビルマ鐵道北端ミッチナの間の路上距離千二百キロ（青森、京都間の距離）を五十

日たらず、一日平均二十六キロの快速で突破したのである。

つぎに、ビルマ作戰は酷暑と惡疫に加へて嶮岨な山岳地帶の作戰でもあつた。

地理的には、ビルマの最北端は重慶や長沙附近と、最南端はサイゴンやフィリッピンのミンダナオ島の北端とほぼ同緯度であつて、熱帶から亞熱帶にわたつてゐる。また、ラングーン、マンダレイをつらねる線は、大體ビルマの中心經度であつて、これを北にのばせば、シベリアではイルクーックとトムスクとの中間附近にあたつてゐる。すなはち、バイカル湖をはるかに西に越してゐるわけである。

地勢的にみれば、三方の國境はヒマラヤの支脈からなる峻嶮な山地で圍まれてをり、若し海路によるのでなければ、ビルマに進入するのには、どうしてもこの山脈を越えなければならないのである。

タイ・ビルマ國境を突破してモールメンに突入した部隊は、峨々たるシャン山系と、これを蔽ふジャングルの突破に辛苦の限りを盡した。ほとんど道らしい道のないジャングル地帶に、みづから道路を切開いた部隊もあつたし、比較的良い進擊路を突進した部隊にしても、辛うじ

て駄馬が通る道を進擊したのだつたが、この駄馬道にしたところが一面の岩からなる斜面を二百メートルくらゐ眞直にのぼるかとおもへば、逆に百メートルも眞さかさまに逆落しになるといふ、極めて急峻な箇所が多く、馬が荷物を背負つたままうしろにひつくりかへるといふやうな狀態で、このため、部隊では相當たくさんの馬を失つてさへゐる。『若しもこの山を越えてビルマ平地に進出した時に、糧食が得られなかつたら、餓死しなければならないといふやうな心配をしながら山越えをした』と某中佐が述懷してゐるが、幸ひなことに、モールメン平地は米の寶庫であつたために部隊は飢ゑから免れることはできたといふ。それからまた五月初旬ビルマ・支那國境を突破した部隊も重疊たる嶮嶽に惱まされた。

ここに忘れてならないのは、このタイ・ビルマ國境に自動車路建設に着手した工兵隊の努力である。これには步兵部隊の一部やタイ國工兵の援助もあつたが、この自動車路の開通は、爾後の作戰に非常な貢獻をしたのであつた。糧食彈藥はもちろんのこと各種の材料、ことにラングーンにいたるあひだの多くの河を渡河するための渡河材料は、この自動車が開通してからはじめて第一線部隊に追及し得たのである。

さらに作戰第二段階における機械化部隊の編成は、この自動車路完成がなかつたならば、到底あれほど迅速かつ完全にはなされなかつたであらう。

また、ビルマの三、四、五月は、ビルマの乾季の末期にあたり、一年中で一番暑い時節で、マンダレイ附近では連日百三十度もの酷熱で、マラリヤ、デング熱、コレラ等の悪疫は猖獗を極はめた。

『ビルマの關税』デング熱はいふにおよばず、マラリヤの如きでも、他ではみられない悪性なものがある。この悪性マラリヤには二つの症狀があり、一つは心臟にきて一つは腦にくる。どちらも非常に急性で、心臟の方は發病してから、數時間で生命を失ふこともあるといふのである。熱病でたほれた犧牲者もかなりあり、これを克服して進む作戰には、戰鬪以上の困難があつた。しかし、わが將兵の燃える氣魄とわが軍陣醫學の優秀さはこれを征服した。

一方、本作戰地區は山岳と密林とを縫つて多數の河川が流れてゐた。この結果敵前渡河戰は頻繁に敢行された。なかんづく、ラングーンを陷れるまでは非常に多く、加へてそれらの河川は全部皇軍の進擊方向と十字に交叉して北から南に流れてゐるため、どうしてもこれを渡河しなければならなかつた。

一月から二月にかけてサルウィーン河を渡河したのをはじめ、ビリン、シッタン、ペグー河などを強行渡河したし、ラングーン攻略以後はイラワディ、チンドウィン兩河ならびに舟艇機動もあつた。もちろん、どの河を渡るにあたつても、對岸には相當有力な敵部隊が控へてゐたのであるから、終始激戰が河上を蔽つたことは當然である。

河川に觸れたついでに、敵の水浸し戰術なるものを紹介しよう。

ラングーン地區で一敗地に塗れイラワディ河にそふ地區に敗戰の兵をまとめた英・印軍は、石油地帶であるヤメセン、イェナンヂョーンの線を確保して、日本軍を水浸しにすると豪語してゐたのである。

これはヤメティン、イェナンヂョーンから南の地域は、シッタン、イラワディ兩河にそふ水田地帶で、雨季に入れば、鐵道、道路、部落を殘すほかは、ことごとく水に浸るところである。從つて雨季まで支那軍とイギリス軍が、このヤメティン・イェナンヂョーン線を確保したならその線の南方に存在する日本軍はほとんど水に浸り、戰はずして勝つといふ戰術なのである。

この敵の戰略に對して、わがビルマ作戰軍は、ひそかに思ひきつた包圍作戰を計畫したのである。ことに、左翼中間突破部隊の進擊した道路はビルマ作戰當初は豫想してゐなかつたものだつた。ところが、モールメンを降し、マルタバンを陷れたころ、わが軍の偵察によつてシッタン河とサルウィーン河との中間にシャン州からラシオ方面へ通ずる山地にもかかはらず、案外立派な道路ができてゐることが判明したのである。

そこで、敵主力をマンダレイ正面に牽制し、そのあひだ兩翼に準備した精鋭機甲部隊をもつて一齊に行動をおこし、敵の退路を斷つ作戰に出たのである。左翼は支那にいたる退路を、右翼はインドにいたる退路を遮斷した。

この作戰計畫が全く圖にあたり、豫期以上の成功をみたのは、もちろん、御稜威のしからしむるところで、同時に第一線部隊の異常なる努力によつたものであるが、ここに忘れてならないものは、何といつても作戰計畫の妙であり、最高指揮官以下幕僚團の功績は戰史に不滅の光彩をそへたものである。

次に特筆すべきは、英・蔣聯合軍の潰滅戰であつたことである。大東亞戰爭勃發以來、南方

作戰で直接重慶軍と交戰したのは、本作戰がはじめてであり、羅卓英麾下のビルマ遠征第一路軍と合作して出擊してきた英・印軍が、徹底的に叩きのめされ、重慶軍また全滅の憂目をみて英・印軍と心中したのである。

前にも述べたやうに、利害打算で結びついたこの英・蔣合作の軍隊が、うまくゆくはずはなかつた。重慶軍主力が意氣揚々とマンダレイにはひつてきたのは三月初旬であつたが、進駐に際してイギリス軍と協議して防衛地區を分擔して、舊王宮はもちろん、市內のあらゆる場所に壕を掘り、陣地を構築しだした。

はじめ重慶軍の兵は市外に駐屯させ、市內にははひれないといふ建前をとつてゐたのだが、軍紀の紊れてゐる重慶兵は、隊を組んでマンダレイ市內を橫行して、ビルマ人の家屋を荒し、その掠奪橫行ぶりは言語に絕するものがあつた。さすがのイギリス兵もみるにみかねて、その暴狀をなじると、いきなりイギリス兵に發砲するといふやうな狀態も發生してゐた模樣だつた。

重慶軍の指揮官はもちろん兵隊さへ、敗走してきた英・印軍の弱さを指摘し、俺達が助けてやらなければ、君らはいまに日本軍に潰滅させられてしまふぞといふ調子で、その鼻息の荒さ

は大變なもので、英・印軍はいつもびくびくものであつたらしい。

重慶軍がマンダレイにはひつてから二週間ほどのあひだは、英・印軍とのあひだに給與問題や感情的な爭ひが絶えず、毎晩のやうに激しい銃聲がきこえ、ある地域などでは、重慶軍の一ケ中隊がイギリス兵の陣地を襲撃し、イギリス側に三十餘名の死傷を出したといふ話もあり、あまりこの種の衝突が發生するので、遂ひにイギリス軍は全面的にマンダレイ防衛を重慶にまかせてイラワディ方面に移動したらしいのである。

五月一日のマンダレイ突入と同時にセント・ジョセフ教會に監禁されてゐた三人のイタリア人牧師が、皇軍によつて救ひだされたが、この牧師の話によれば、四月はじめころは、ラングーンから逃れてきた連中も合せて、マンダレイにはまだ百五十人ほどの米・英人がゐたが、まもなく開始されたわが荒驚の猛爆にびつくり仰天してみな逃げてしまつた。四月二十九日は朝から大混亂をきたし、食物も持たないアメリカ兵が、ラシオ・マンダレイ鐵道上のメイミョーの方から走り込み、市内は右往左往する兵隊で大變な騒ぎだつた。

重慶軍は二週間も前から街に放火をはじめ、一夜に五ケ所、六ケ所と火をつけ、一番酷かつ

たのは二十九日夜で、三十ケ所もの地區から火の手があがり、マンダレイはまるで晝のやうな明るさだつたといふ話である。

すでに敗け癖のついてゐる英・印軍の意氣地なさは驚嘆に値するもので、危ふしとみれば、いち早く退却するため終始皇軍の矢面に立つて甚大な損害を受けた重慶軍は、氣の毒といへば氣の毒であるが、マンダレイ方面の重慶軍の退却せる地域は、部落は燒かれ、收穫された籾も燒かれ、婦女子もまた犯されざるはないといふ狀況で、彼等が他國にはじめて進駐してなしたこの徹底的な掠奪暴行と、無制限な焦土戰術とが、無辜のビルマの民にあたへた被害からして、彼等の罪は永遠に赦されないであらう。

＊　＊　＊

ビルマ作戰

結論すれば、ビルマ作戰は、敵の準備の完からざるに乘じ、かつ、なるべく迅速にラングーンを攻略するために、十分な兵力の集結、または後方補給路の完成をも待たず、ほとんど徒手空拳といつた狀態で、タイ・ビルマ國境の山岳と密林を突破、あらゆる自然の障碍にも屈せず遮二無二突進した第一段階の作戰と、次には、ビルマに侵入せる支那軍および英・印軍に對し

シンガポール陥落に伴つて海路船團によつてラングーンに到着した有力な増加兵力およびこの時漸く完成したタイ國境からラングーンにいたる自動車路によつて運ばれた機甲裝備を合せておこなつた第二段階の計畫的大殲滅作戰の二つに劃然と區別しうる。

ことに作戰第二段階こそは、ビルマ作戰の大詰ともいふべき一幕で、作戰第一段階中各部隊がなめたもろもろの苦心も、ここにいたつてはじめて酬いられたのである。

二　陰の力

——ビルマ人の協力と謀略宣傳——

前にも述べた通り、本作戰の敵は、イギリス軍ならびに重慶軍であり、これに加へてスチルウェル以下重慶軍指導のアメリカ將校團と空軍、さらにアメリカ義勇軍も加はつてゐたのである。大東亞戰爭の主敵たる米・英・蔣を一纏めにして叩き潰した點に、從來のいづれの作戰にもみられない痛快な特異性があるのである。

豫想以上の惡條件と戰つてこの赫々たる大戰果を築き上げたのは、もとよりわが忠勇無雙の

將兵の善謀勇戰である。峻嶽、大河、千古斧鉞を入れぬ大ジャングルも、破竹の勢ひのわが將兵の前には、何等の防塞となり得ず、惡疫も却つて『何糞ッ』といふ士氣を鼓舞するばかりであつた。

作戰指導の優秀さは、すでに作戰の經過をたどられた讀者の明瞭に諾けるところであらう。しかし、ここにビルマ作戰にのみ特に働いた『蔭の力』としての二つの事實をあげなければならない。

まづ英・蔣を憎み、日本に限りない親しみをもつビルマ人の作戰協力であり、さらに最も有效にしてかつ適切にもちひられた近代戰の武器『謀略宣傳』である。

＊　＊　＊

ビルマの民は擧げて皇軍を歡迎し、あらゆる協力を惜しまなかつた。ビルマ人は日本に對する信賴は全く徹底したものであつた。もちろんこれは皇軍が威あつて猛からず、恩を施して驕らぬ結果であり、過去數十年にわたるイギリスの壓迫搾取の報いであるが、開戰以來イギリス側が執拗につづけたデマ宣傳も强壓政策も、遂ひに住民の憎惡と親日感と獨立氣運を覆へす

とができなかつた。

イギリスの桎梏より獨立せんとするビルマ人義勇軍の活躍はいはずもがな、一般民衆がよろこんで皇軍將兵に協力し、その勞をねぎらつたことは、作戰遂行にどれだけ役に立つたかは想像以上である。

その原因はいふまでもなく、長年にわたるイギリス政府の露骨極まる搾取壓政に對する反感であるが、一つには經理の觀念には疎いが、政治には大いに熱狂するビルマ人の特性により、幾度か衄られた獨立運動の失敗、さらに大東亞戰勃發前後からインド防衛の第一線としてビルマにぞくぞくと送り込まれたインド兵を主體とするイギリス軍の暴虐の限りをつくした非行の集積がさらにこれに拍車をかけたものであり、さらに蔣介石軍の無軌道な亂暴行爲に對して、ビルマ人は怨み骨髓に徹すといふ實況であつたのである。

さうしたことがただちに大東亞民族の自主自立を目指す日本の聖業を、實際自然に理解せしめる動機となつたのである。

住民全體を全き意味で味方にしてゐたことが、ビルマ作戰を遂行するうへにどんなに大きな

便宜になり、かつ皇軍將兵の士氣を鼓舞したか。その反對に、住民自身を敵に廻した英・印軍と重慶軍が、優秀な裝備と數においても厖大な兵力を有しながら、どんなに精神的の脅威と、物質的な不便を蒙つたかもおのづから明らかであらう。

まづ、對日信賴の結晶としてあらはれたものは、ビルマ作戰開始と前後して結成されたビルマ獨立義勇軍である。ビルマにおける獨立黨として長年隱然たる勢力をもつてきたタキン黨の青年黨員を中心としてできあがつたもので、實際戰鬪に參加した黨員は、タイ國首都バンコックで祕密裡に獨立義勇軍結成式を擧行、銃を執つて皇軍の道案内役になつて、國境を越え、ことに山蛭に惱まされつつ、道なきジャングルを突破して行つたタヴォイ攻略においては、慣れた自然的地形を利して、主力たる日本軍兵士も舌をまくぐらゐの鮮かな働きぶりを示した。他の各地においては戰鬪そのものには大して參加しなかつたが、なにしろビルマ一流のインテリ揃ひ、住民と同一の血を承け、同一の言語を話すのだから、情報の蒐集はお手のものだし、道案内はいはずもがな、必要な物資のかりあつめ、治安の確保などには、偉大な效果を擧げた。

さらに、この獨立義勇軍の幹部の中には、日本留學の經驗者もあり、隊員すべてがわが軍の

意圖するところを十分に理解するところから、街や部落にはひれば、その日から宣撫活動を開始し、わが軍の意圖を老若男女すべてに理解させ、忽ち治安確保へ、復興へと移つてゆく。

わが軍の占領地の擴大とともに、この獨立義勇軍も非常な勢ひでその勢力を增してゆき、モールメン、ペグー、ラングーン等の各都市では、これらの都市が皇軍の掌中に歸した翌日から、街角にはB・I・A（ビルマ・インデペンデント・アーミー）の腕章をつけた青年が警備につき、戰火に家を追はれたひとびとへの食糧その他の物資供出にあたつてゐる姿が見られた。

イギリス軍に對するビルマ人の感情は前にも述べたやうに、先天的なものがあり、實に根强いので、イギリスはビルマ人に武器をあたへなかつたのであるが、相次ぐ敗戰に治安の確保など考へてゐられなくなつたイギリス側にとつて、ビルマ人に反感をもたれてゐるといふ觀念は、彼等を恐怖のどん底に陷れた。

事實、獨立義勇軍が何月何日に鋒起するといふやうな流言は、ラングーンにもペグーにもプローム地方にも非常な勢ひで流布されたらしい。

獨立義勇軍とは別に、住民そのものが飽くまで日本および皇軍を信賴するといふ態度によつ

てわが軍の作戰を圓滑ならしめた例もすくなくない。

ビルマ人が命よりも尊しとする寺院さへ、これを陣地とする等の暴虐を敢てした英・蔣軍に比して、皇軍將兵はいづれも佛教徒の國民であり、寺院を崇拜することを知つてゐた。これなどは巧まずしてビルマ人の心の絲に觸れるものであつた。

まづ第一に、占領地の後方警備に大部隊の兵力を割く必要のなかつたこと、第二に、敵側のゲリラ戰が全くなかつたことなどは、機動作戰を遂行するうへの具體的好條件となつた。

さすがゲリラ戰を十八番とする蔣介石軍も、ビルマではゲリラをおこなふ餘地が全くないことを嫌も應もなく知らされ、却つて住民からゲリラをやられるのは彼等蔣介石軍であつたといふ、世にも不思議な立場におかれた。

例へば、蔣介石軍やビルマ軍の配置などは、住民の報告でわが方に筒拔けだし、兵力が分散したり、敗走に移つたりした場合には、附近部落の、ビルマ人達に取り卷かれて捕虜にされたり、傷つけられたりしなければならぬ破目に陷る。また數輛のイギリス軍戰車が逃げ込んだのを村民が皇軍に密告し、これを捕獲せしめたことなどもあつたが、悲しいことに、イギリス軍

は怒つてその村民を報復的に虐殺した。

しかし、これがビルマ民衆を却つて激昂させ、イギリス軍對ビルマ民衆の爭鬪はますます熾烈となつた。そのため敗走にあたつて、あの傲慢なイギリス人が、自分はアメリカ人だと僞り、重慶軍は日本軍なりと稱してビルマ人の復讐の手を逸れなければならないやうな悲慘な現象さへおこつた。

わが〇〇兵團がトーングーからマンダレイ方面に向つて北上進擊に移つた頃、防禦陣地を破られて敗走に移つた蔣介石軍部隊は、新手のゲリラ戰術を案出した。

自分等は日本軍だと稱しながら、故意に掠奪や暴行をほしいままにした。いまだ日本人などを見たこともない住民に『日本軍は恐るべき野蠻な國民である』とのイギリス側のデマ宣傳そのままを、彼等の『事實』をもつてビルマ人に信じさせようとしたのだつた。

北部ビルマの無智な住民の中に、この『僞日本軍』の惡辣な手段が若干の效果を現す兆が見え、まだ見ぬ皇軍に對する信頼が、ややグラつきはじめた時、ある部落の僧侶が單身彼我兩軍の前線を越えて、蔣介石陣の眞只中に入つて行き、『日本兵と支那兵の識別法三ケ條』——簡單

ながら非常に明瞭なものであるが、いま發表の自由をもたない——なるものを作つて、支那兵がこれから逃亡して行く道筋附近の部落、部落にふれ廻り、日本軍は決して掠奪などはしないと說いて歩いた。

かうして蔣介石軍窮餘の一策は、ここに全く畫餅に歸し、ばけの皮を剝がれた彼等は、却つて住民の反擊に遭ひ、敗走さへ意にまかせぬことになつたといふ。

さらにまた、モールメンからラングーンまで、北から南に流れる大小十指に餘る河川を、東から西へと渡河する各部隊の渡河に際して住民が示した好意は、タイ・ビルマ國境の後方補給路がまだ完全な形にできあがらず、架橋材料その他も整備されなかつた時だけに、偉大な效力を發揮した。

青年僧侶たちを指導者とするビルマ住民はサルウィーン、シッタンの兩大河でははるか遠方から舟艇を集めて來て提供し、比較的河幅のせまい川では、附近の竹森から南方獨特の大竹を伐り出して、兵隊さんの筏作りを應援したり、あるひは架橋に、渡渉路の構成に獻身的な努力をし、巧みな腕前を示した。

また、ビルマ作戰の全期間を通じて、輸送機關として大きな偉力を發揮した二頭立二輪のビルマ特有の牛車の功績も見逃してはならない。この牛車の使用は、住民の協力なくしては絶對にやれないことだつた。

大體が、農家に一臺か、二臺しかない牛車は、他國の軍隊に貸しても益ないといつて隱してあればそれきりのものだし、連日連夜行軍奮鬪をつづけてゐるわが將兵が、遠いところまで牛車の徵發に出向くことなどは不可能だつた。

ところが、ある部落にはひつて村長なり、主だつた僧侶なりに、一定の數量の牛車を依頼すると、數時間後には、どこからともなくチャンと牛車が集まつて來る。もちろん、馭者つきである。後でこそ日本の兵隊さんもこの牛車の使ひ方に馴れたが、當初は使ひ馴れたビルマ人でなければ、とても牛はいふことを聽かない。牛に曳かれて善光寺詣りといふことがあるが、皇軍は牛車とともにパゴダからパゴダへと進擊したのである。

牛といつても案外に早い。長い行軍では人間の倍も早い。この牛車が彈藥も運べば資材も食糧も運び、たまには傷病兵をも運んだ。自動車が自由に使へない地方では、これによつて各部

隊の輸送力がどれだけ增加したかはかり知れない。

最後に、ビルマ民衆の親切を語らなければならない。本當に一般民衆は心から——斷じて强者に對する追從ではなかつた——よろこんで皇軍の勞をねぎらつた。

作戰開始當初、南ビルマ地方に全く缺乏してゐた野菜、果實等の生鮮食糧を集めてくれたのは住民であつた。

行軍に落伍した一人の兵といへども、何等の危險を感じなかつたばかりか、ビルマ人は飲食のサーヴィスから負傷の手當、果ては道案內までしてくれるのである。

偵察からの歸途、密林に道を失つた斥候、敵中に不時着せる傷ついた荒鷲が、ビルマ人の溫い保護のもとに敵の捕虜になることを免れ、無事本隊に歸着して戰友を驚かした例など、枚擧に遑がないほどあつた。

また瀕死の重傷のわが勇士に、よろこんで輸血の血をささげたビルマの乙女、イギリス兵の拳銃の前にも屈せず、皇軍の在り所をいはず、銃殺されたビルマ少年、佛塔に皇軍傷兵をかくまひ、闖入せる支那兵に向ひ、佛の御名のもとに佛敎徒を保護すと敢然山門を守つて憤死した

ビルマ僧など、皇軍將兵をして異境に戰ふ苦しみを忘れしめるに十分であつた。

＊　＊　＊

次に宣傳謀略であるが、これも住民自身の親日感情と若干の關聯をもつ。

作戰初期、地形上の關係から、戰車、砲その他の機械化兵器が自由に使用し得なかつたあの戰場で、近代戰の最新鋭戰術宣傳戰だけは、最も熾烈におこなはれ、しかも立派な效果を收めたのである。

ビルマ作戰にあつて、宣傳戰が何故盛んに行はれ、何故その技術において立ち遲れてゐると稱せられる日本が、老練なイギリスおよび重慶に勝つて、最大の效果を收め得たか。

第一に、盛んにおこなはれたのは、他の戰線と異り、大東亞戰の勃發とビルマ攻略戰開始とのあひだに一ケ月餘にわたる準備期間があり、ただちに作戰行動そのものにはひらないうちに宣傳技術をもちひる餘地があつたためであり、第二に、ビルマ防衛の敵軍構成の複雜性に基く間隙を狙ふことができたためである。

すなはち、ビルマの敵はイギリス軍あり、インド軍あり、蔣介石軍あり、ビルマ軍あり、空

軍にはアメリカ軍まではひつてをり、しかもビルマ軍の如きは、その中に數種族が含まれてゐたし、ことにいはゆるビルマ國境守備軍と稱せられるものは純粹のビルマ人を一人も含まず、ビルマ兵を主體とし、チン、カチン等のビルマ少數民族をもつて組織され、ある部隊の如きは中隊内の命令傳達にも幾人かの通譯を要するほどだといはれるくらゐである。

この雜然たる構成は、必然的に敵の内部相互に、嫉視反感あるひは猜疑不滿を生み、宣傳謀略をもつてこれを分裂させ、士氣沮喪せしめるには絶好の對象であつた。

また、ビルマ民衆全體に對して日本の眞意、眞のニュースを知らせることも作戰の遂行上絶對に必要なことであつた。何故にこの宣傳工作が豫期以上の效果を收めたかは、要するに、つぎつぎに眞實で裏書されたからといふほかはないが、前述の如き敵軍内の複雜性、住民の歷史的反英反蔣感情などの原因が、わが方の宣傳の衝にあたつた人々の熱意と相俟つて大きな蔭の力となつたことは爭へない事實である。

軍當局では、十二月下旬早くも腰を据ゑて、對ビルマ宣傳を開始した。ラジオによるビルマ語およびインド語放送を行つて、大東亞戰爭の戰果、世界情勢などのニュースを誤りなく傳へ

るとともに、ビルマ獨立の必然性と日本のそれに對する援助供與などをくり返し徹底させ、同時に飛行機による『紙の爆彈』をビルマ領内各都市、ことにラングーン地區にまき、作戰開始後は軍宣撫班自ら占領地において住民の宣撫工作にあたつた。

ラジオ放送が大きな效果を收めてゐたといふ何よりの證據は、いままで自由に短波無線の聽取を許してゐたビルマ政廳が、初めのうちこそ日本側に對抗して、『日本は佛教國なのにもかかはらず、佛教國ビルマを侵略せんとしてゐる』など理窟にならぬ理窟をのべて、日本側ニュースの正確さを覆はんとしてゐたが、遂ひに言葉のうへでは何ともならぬと悟るや、卒然として約變、日本側の放送聽取を禁ずる法令を命令した事實である。

國内ビルマ人に對する宣傳においても、イギリスはすでに一敗地に塗れたのだ。

このラジオによる宣傳は、思ひもよらぬところにまではひり込んでゐた。ビルマ作戰が終幕に近づいて、お伽の國シャン州の地に皇軍がはひつて行つた時、某參謀がシャン州の土侯の私邸で王様に面會した。ところが、あの山中の王様が、世界狀勢や戰況の進展を實に正確に知つてゐて、その參謀を驚かした。尋ねてみれば、シャン州のこの王様は、イギリス側の禁令に背

いて日本側の放送を聽いてゐたといふのである。はじめのうちはあまり素晴らしい日本の戰果なので、半信半疑であつたが、つぎつぎに事實となつて現れると、どうしても信頼しないわけにはゆかなかつたと、その王様は告白してゐたといふ。

この日本からのビルマむけ放送については、去る五月十五日イギリス情報省通信員ジョン・ガルヴィンが、面白い報告をニューヨーク・タイムス紙に書き送つてゐる。

『日本人と結婚したあるビルマ婦人は、日本の女ホーホー卿である。(筆者註、ホーホー卿といふのは、ドイツのある英語放送者の名稱で、オックスフォード流の粹な口調と、上品な皮肉とでイギリス人の心に喰ひ入つてゐる點で世界的に有名な放送者である。)彼女は東京から銀の鈴をころがすやうな美しい聲で、日本の美德を稱揚し、「日本は約束する。日本の爆擊機はビルマの美しいパゴダを、注意深く回避するであらう。しかし若しも萬一不幸にも、その瓦の一片でも爆擊で破壞されたなら、日本軍の到着後、ただちにそれを修理するだらう」と放送したのである。日本からのこのやうな放送によつて、ビルマ國民は今や熱烈な愛國心に燃え、日本と協力し、日本に絶對の信頼を寄せてゐる。』

『紙の爆彈』すなはち投降票や、宣傳ビラの效果については、インド兵部隊からの逃亡兵や投降兵が非常に多く、ことにラングーンに設けられた捕虜收容所で收容した捕虜全部についてしらべた統計によると、捕虜の過半數がわが軍の飛行機から撒布した投降票か、または宣傳ビラを見て逃亡して來たといふのである。申告した捕虜の心理にいくらかは誇張があつたとみても、これらの宣傳工作が敵の內部動搖を誘發した效果は、かなり大きいものとみなければならないだらう。

ビルマ作戰軍は、宣傳戰においても敵を擊滅したのである。

三　彼等の敗戰記

この章を終るに當つて完膚なきまでに叩きのめされた英・蔣聯合軍の敗戰ぶりを、彼等の側から語らしてみよう。

アメリカ人記者の悲鳴　英・印軍總司令官ウェーヴェルは、ロンドンのデーリー・テレグラフ紙にビルマ從軍記者と特別會見して、次の如く敗軍の將兵を語つてゐる。

『マングレイを喪つてからのちは、イギリス軍は海上からの增援軍および軍需品補給を受けることができなかつた。イギリス軍はマニプール（チッタゴン南方）を經由して、ビルマへ進擊する作戰に希望をつないでゐた。また、われわれは雨季のはじまるまで北部ビルマを確保しようと望んでゐたのであるが、日本軍の進擊が意外に早く、イギリス軍の左翼にあつた支那軍の陣地に楔を打ち込まれ、さらにラシオを占領されるにいたつたのである。

イギリス軍は最善の方途を盡したし、その多くのものは、數ケ月間一刻の休みもなく戰つた。彼等は增援を待つ希望もなく、何の慰安も得ることなく、敵性ビルマ人は常に背後から狙つてゐるといふ苦境の中に惡戰苦鬪をつづけたのである。また、鐵道や公共事業の從業員たちは、日本軍の最初の爆擊によつて、全部逃亡してしまひ、ビルマは、大混亂に陷つたので、事態はなほ一層困難を極めたのであつた。日本軍の優秀性は特にその山岳戰において遺憾なく發揮されたと思ふ。』（ブエノス・アイレス五月五日發）

あの傲慢なウェーヴェルも、皇軍の勇敢な進擊と巧妙な作戰には驚嘆、皇軍を賞讃してもつて自己の慘めさを幾分なりと救はねばならなかつた。

イギリス人は、多少は體面上控へ目の報道をなすのはやむを得ない。しかしアメリカ人は率直に悲鳴に似た報道をしてゐる。

皇軍の急進に潰走するイギリス軍とともに命からがら逃げ廻つたニューヨーク・タイムス特派員ジャック・ベルデンの電報は、實に慘澹の一語に盡きる。

『マンダレイ陥落を契機として、英・蔣聯合軍のビルマ作戰は不幸な結末を告げた。記者はいまインド國境に近い北部ビルマのスチルウェル將軍の小さな司令部にゐる。スチルウェル司令官はインド國境に通ずるイギリス軍敗走路の後衛部隊の指揮にあたつてゐるのである。日本軍は信ずべからざる速力で聯合軍の右翼左翼に迫つて、包圍體勢を整へてをり、われわれは何とかしてこの迫り來る包圍環から脫出せねばならぬのである。日本軍は過去二週間に五百六十キロを進擊し、一日の行程は四十キロであつた。日本軍の恐るべき壓迫に加ふるに食糧および飲料水の不足と、道路の不完全で、聯合軍の苦難はその極に達した。ミッチナに通ずる鐵道は、日本航空部隊の猛爆で滅茶苦茶にされ、レールはビルマ人によつてその釘を引拔かれ、轉轍機は破壞され、暗夜には列車が襲擊を受け、今や全く使用に堪へぬ有樣である。

負傷兵の後方輸送には牛車を徵發して使用してゐるが、傷兵の大部分はてくてく歩くのである。敗走中の聯合軍が日本軍の攻擊を免れるか、あるひは殲滅されるかは、ただ大雨が降つて道路を泥濘とし、日本軍機甲部隊を釘付けにするか否かに懸つてゐる。この記事を書いてゐる間も、記者は戰々兢々たる有樣で記事に身を入れることさへできず、「ビルマ最後の日」の印象をただ取り止めもなく書きつづるにすぎない。昨夜記者はイギリス・ボンベイ駐屯軍工兵部隊の年若い二兵士の側に立つた。彼等はイラワディ河に架かつてゐる東洋第二の鐵橋を爆破する有樣を眺めてゐた。インド兵砲手の打出す二十五サンチ砲彈はマンダレイの方向に集中してゐる。マンダレイ市は放火により四月四日以來燃えつづけ、電燈のない市內にはビルマ人の遊擊隊員が活躍して、守備の重慶兵士を襲擊してゐる。マンダレイは荒廢に歸して、かつて十二萬の人口を擁したこの街は、宮殿の城壁を除いては全部が荒野と化してしまつた。米、鹽、石油、錫を日本軍に抑へられた聯合軍はビルマ戰に關する限り決定的な最後の段階に逢着し、特にビルマで產出する石油の大部分を日本にとられた今日、殘り少な

い石油をもつてしては今後の戦闘遂行も全く困難であると斷定しうる。ビルマ戦の失敗はすでに二ケ月前から判然たるものがあつた。その理由はイギリス軍は健全な政治的論理を缺いてをり、戦争目的を持つてゐなかつたことである。ビルマ人は獨立を高唱してイギリス軍に協力せず、日本軍のビルマ進撃に刺戟されてビルマ人はイギリス軍に對し劍を執つて蹶起したのである。

ビルマのイギリス軍に對する敵意により、イギリス軍はただ盲目的に戦ふほかなかつた。また空軍の不足も聯合軍のビルマ敗戦の原因の一つであるといへよう。』

しかり、イギリス軍だけではない。アメリカも重慶もすべて健全な戦争目的をもつてゐなかつたのである。搾取と虐待、掠奪と放火をあへてした彼等にいま天刑がくだつたのである。

第三章　興るもの、崩れゆくもの

雄大にして巧妙な作戦構想、正義の戦に死をも恐れない皇軍將兵、英・蔣軍を憎み皇軍を信頼するビルマ民衆、これが三位一體となつた『アジアの地力』は遂ひにビルマを救つた。

ラングーンからマンダレイへ、そしてインドへと敗走千里のイギリス軍は、ビルマの要人連を道連れとし、インドにおいて傀儡亡命政府の樹立を目論んだが、アジアの血を享け、アジアの地に育つたこれら要人たちは、イギリス軍の監視の目を身を以て逃れ、山間に潜み、皇軍のいたるを待つてゐた。

ビルマ反英運動の闘將元首相バーモ博士も、シャン州北部のモコック刑務所に監禁されてゐたが、四月十三日バーモ博士は、彼を慕ふビルマ民衆としめし合せて、モコック刑務所を破獄し、英・蔣兩軍必死の捜査網を潜り、ジャングルの奥深く遁入した。

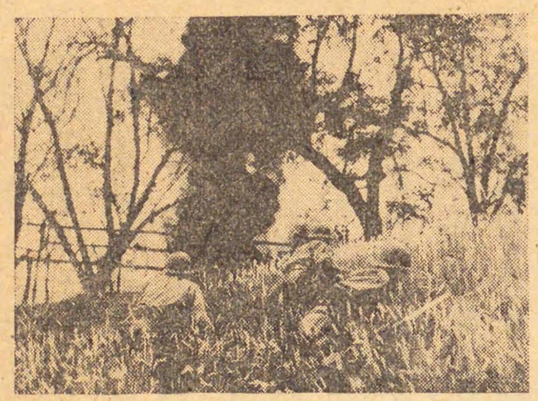
狼狽した英・蔣側は『見付け次第射殺せよ』との嚴命と、三萬ドルの懸賞金までかけて、そ

の捜査網は徐々に博士の隠家に迫つてゐた。五月一日のマンダレイ入城とともに、この情報を得た皇軍は、博士の救出の一刻も猶餘しえぬのをみてとり、十名のわが憲兵隊員をして、敵中に決死的潜行をおこなはせることに決意した。

十名の憲兵隊員はビルマ服を身にまとひ、密偵の報告を頼りに重慶軍の充満してゐるメイミョー東北二百キロのパンサン附近におもむいた。敗殘重慶軍部隊に發見される危險に絶えず脅かされながらも、五月二日わが憲兵隊員の先發三名は、パンサン附近の部落の民家に隠れてゐたバーモ博士夫妻を救ひ出すことができたのであつた。

その他大部分の要人たちは、わが憲兵隊員の敵中決死の活動によつて、ほとんど無事救出された。

かくて六月四日、ビルマ方面軍最高指揮官はビルマにおける軍政施行の布告を嚴肅に發すると同時に、ビルマ民衆の一日も早き安居樂業を希望して、治安の回復、産業の復興など緊急行政事務を處理するために、中央行政機關設立準備委員會の結成をも布告したのである。



滇緬國境附近
殘敵を追ふ皇軍精鋭

布告

大日本軍はビルマにおいて戰史未曾有の赫々たる戰果をもつて英・蔣聯合軍を殲滅せり。またホンコン、マレー、フィリッピン、ボルネオ、ジャワ、スマトラの諸島を含む大東亞領域の戡定をすでに終り、武威更に濠洲およびインドを壓しつつあり。大東亞戰爭開始以來半歲にして大東亞における英・米勢力は一掃され、殊に英帝國の崩壞の兆は、日々著しきものあり。アジアの前途は正に洋々たり。然りといへども長期戰への移行を豫期せざるべからず。完勝への途はなほ未だ遼遠なり。軍は大東亞戰爭の完遂を期するため軍の占據せるビルマ地方に軍政を施行せんとす。

軍政下においては利敵行爲、反日行爲および軍の命令に違反することを許さず、もしこれを犯すものあると

きはその何人たるを問はず毫も假借せず、峻嚴にこれを處斷す。また戰爭遂行上余が必要と認むる處置は何人の掣肘をも受くることなくこれを遂行すべし。

親愛なるビルマ人よ、余は今次作戰間諸子の我軍に對し示したる深厚なる好意の各種の例を知悉しあり、諸子に對する親愛の情はいよいよ深きを加へたり。またわが東條首相がビルマ獨立に關してなせる聲明はひとり首相の意志に止らず、日本國民全體のビルマに對する感情を表現するものにして、また實に余が諸子とともに速かにその時期の到來せんことを希求しあるところなり。しかれども現在の段階は未だビルマの獨立を實施すべき時に達せず、蓋し大東亞戰爭における我らの完全なる勝利なくしてアジアの復興なく、またビルマの獨立なし。現下まづ求むべきは大東亞戰爭における我らの完全なる勝利とす。今や一切の施策を擧げて戰爭の勝利に歸一せしむべき秋とす。これ等が軍政を施行せる所以にして諸子は軍を信倚理解し、衷心よりわが軍政に協力せんことを希求す。わが軍政下において勝利の追求を第一義として一切の施策をなすべしといへども一面無用の壓迫乃至干涉は極力これを退け、つとめて民意を尊重し、委すべきものはなるべくこれをビルマ人自身の手に委せつつビルマの

育成發展につとめ、もつて相携へてアジア民族共存共榮の道を邁進せんとするものなり。これがため、つとめて速かに中央行政機關を設立せんことを企圖し本日の成立準備委員會を結成せしめ左記人物を委員に任命したり。委員會は本日以後中央行政機關の成立準備に任ずるとともに余の指揮下にありて治安の回復、產業の復興など、緊急を要する行政事務につき余を輔佐し、またこれを擔當しもつてビルマ民衆の擁護に任ずべし。諸子は速にわが軍の眞意を理解し安んじてその居につき各々その生業に精勵するとともに中央行政機關設立準備委員會とともにわが軍に對する協力の實をいよいよ發揮せんことを希望す。

左　記

ドクター・バーモ、タキン・ミヤ、タキン・トンオク、ドクター・テーマウン、ウ・ラ・ペ、タキン・ヌウ、パンドラ・ウセン、タキン・パセン、ウ・パ・テイン、ウ・バ・ベ

昭和十七年六月四日

大日本軍司令官　飯田祥二郎

峻嚴な態度のうちにも慈愛に溢れる溫情が藏される恩威兼ね備へたこの布告に、全ビルマ民

衆は感泣した。

バーモ博士を首班とする各委員は、飯田軍司令官の前に嚴肅に獻身と協力を誓ひ、ただちに中央行政機關の設立準備に着手したのである。

ビルマ中央行政府誕生　そして全ビルマ待望の日は遂ひに歡喜と榮光のうちに訪れた。

八月一日、ビルマ中央行政機關長官任命式は午前十時半からラングーン軍政監部において飯田最高指揮官によつて嚴肅におこなはれ、つづいてシューレ・パゴダ街の市廳舍で感激のうちに行政府開廳式を擧行したのである。

ビルマ行政長官ならびに行政府各部の十長官は次の如くである。

行政長官	バーモ博士
長官房	高野源進
無任所長官	タキン・ミヤ
內務部長官（兼）	バーモ博士
財務部長官	テインモン

農務部長官	タキン・トントン
森林部長官	タキン・トンオク
商工部長官	ウ・ラ・ペー
司法部長官	ウ・ウーン・アウン
土木復興部長官	パンドラ・ウ・セイン
教育衞生部長官	ウ・パ・ウイン
交通灌漑部長官	タキン・パ・セイン

バーモ博士は、ラングーン西方マウビン生れで當年五十歳、イギリスならびにフランスに留學して學位を獲得、辯護士となつたが、昭和六年のギャロン大叛亂事件を契機としてビルマ獨立運動に身を投じ、翌年『反英ビルマ獨立』を唱導して民衆の支持のもとに政界入りをした。昭和九年文部大臣となり、ビルマが昭和十二年インドから分離した後、新憲法のもとに首相となりバーモ內閣を二年間率ゐて、常にイギリスの壓政と鬪つたのである。昭和十四年野にくだるや『自由同盟』を結成し、獨立を目指して本格的にイギリスとの鬪爭を開始し、今次歐洲戰

爭の勃發と同時に、ビルマ獨立のため以外の戰爭支持を拒絶して、同志とともに猛烈な反英運動を起したため、昭和十五年末遂ひにイギリス當局の逮捕するところとなつて、モコック刑務所に囹圄の身となつたのである。

入獄中大東亜戰爭勃發し、本年四月の英・蔣密約によつて重慶側に引きわたされることになつてゐたが、これを知つたバーモ博士は、博士を敬慕するビルマ民衆としめし合せて同月十三日、典獄の晝寢のすきをうかがつて脱走、幾度か襲ひかかつた身邊の危險をのがれて五月十二日、前に述べたやうにわが憲兵隊員の手によつて救はれたのである。

その永い反英運動の經歷と、ビルマ人の信望からしても、博士こそビルマ第一の人物で、博士を中心とするビルマ民族の團結は、その前途まさに洋々たるものがある。

この輝かしい新生ビルマ發足の日、行政府開廳式の擧行される市廳舍前の廣場には、小旗を手に市民が瞳を輝かして群がり、ビルマ古式に則つて樂器が晴れた日光のもとに美しい旋律で開式を知らせれば、歡呼の聲はラングーン全市に轟き、バーモ長官以下が、前庭の銀ネムの若葉の下に現れれば、群集は一齊に『ドバマ』を絶叫してさらにその壯圖を祝すのだつた。

翌日の八月二日、バーモ長官以下各部長官は、午前八時うち連れてシュエダゴン・パゴダに新任報告の參拜をなし、大僧正への禮拜と挨拶ののち、古式床しい饗宴がパゴダの奥深くでおこなはれ、正午新行政府で、成立披露の招待會も盛大に行はれた。

同時に、行政府成立慶祝は、ビルマ歡喜のうちに各都市でおこなはれたが、地元ラングーンのBAA運動場では、民衆大會やビルマ舞踊劇の公開など多彩な催しが繰りひろげられた。

なほ行政府成立に際し、飯田最高指揮官は、ビルマ民衆に對して、次の如き布告を發した。

『余はさきにバーモ博士を委員長とする中央行政機關設立準備委員會を組織し、中央行政機關の設立準備に當らしめたるも、委員長以下の熱心なる努力により逐次これが準備を完了せるに至れるをもつて、茲にバーモ博士を行政府長官に任命し、本日行政機關各部長官以下の重要職員の任命式を擧行し行政機關を開廳せしめたり。

顧みれば二月中旬、舊英總督のビルマ退避以來ビルマ中央行政機構の機能を喪失してよりここに五ケ月、完全に英國の覇絆を脱し、ビルマ人行政機關と日本軍軍政統治下に樹立、以てビルマ建設史上に不滅の礎石を印したる次第にして、ビルマ今後の發展のため誠に慶祝に

堪へざるところなり。惟ふに今後行政長官バーモ博士以下各官の奮勵努力により治安回復、戰禍の復舊、一般民衆の福祉增進期して待つべきものあらん。

余は軍政施行に當り行政部長官以下の手腕と熱意に格段の期待と信賴をかけをり、一般民衆また行政機關に全幅の信賴を寄せ官民一體となり擧國一致以て新興ビルマの健全なる發展を期すべし。

なほ余は、この機會に當りビルマ將來の發展の問題に關し一言す。ビルマの民衆多年の熱望は余の熟知するところなり。而して又日本のビルマに對する態度に關しては東條首相の聲明せるところにして、この趣旨は本日に至るも何等變更することなし。

然れどもビルマ人のビルマ建設のためにはビルマ人が銘記すべき二大要件あり。

その一はビルマ人が戰爭の勝利のために過去數ケ月にわたり示したると同等、又はそれ以上熱烈なる協力を日本軍に致すことにして、他の一はビルマの民力を急速に且十分なる程度に充實することこれなり。

第一の要件につきては多くの言を要せざるべきも、大東亞戰爭に於けるわが大日本帝國の

勝利なくしてはアジアの復舊もなく、ビルマの隆昌もなし、ビルマ人はよくこの大局の理を了解し、戰爭は日本人のみならずビルマ人も共に戰ひつつあるとの觀念の下に、何を措いてもわれ等の戰爭の完勝を第一義とし、完全なる協力の實を示さんことを希むものなり。

次に第二の要件につきて述ぶ。抑々一民族が、黨爭激甚なる此の世界の中に於てその發展を圖るためには國力に於ても將亦武力に於ても相當なる實力を備へざるべからざることは何人と雖も了解しあるところにして、實力の養成こそはその基礎條件とす。即ち全ビルマ人はこの際奮起一番、眞に更生的努力の精神を振り起しビルマのために働き、實力の涵養に邁進することを要す。

今次行政機關の設立に當りても余はビルマ人の精神を尊重し委すべきものはこれをビルマ人の手に任じ、ビルマ人によるビルマの政治を行はしめんと欲し、その趣旨は行政機關の機構中にも將亦地方行政機構にもつとめてこれを具現せるところにして、今後に於ても前記二大要件實行の實績に照しつつ逐次ビルマ人の欲する方向に進めたき意嚮を有す。民衆はよく日本及び日本軍の信義に信賴し、前途における更に輝く光明を目指し心を安んじて現實の健

全なる歩みを進めんことを期すべし。

大日本軍司令官　飯田祥二郎

余はつとめてビルマ人をしてビルマの政治を行はしめんとの意圖を有すとの明快なる布告は實に新生ビルマの門出に對する無上のはなむけであつたらう。

これに對しバーモ長官は、その施政方針として次の如き要旨を語つてゐる。

(一)　米・英勢力の東亜よりの徹底的排除と大東亜戰への全面的協力

(二)　ビルマの將來の繁榮を目指し全力をつくして國力を充實、大東亜共榮圏の一翼としてその職分を全うする

(三)　ビルマ民衆と日本人との永遠の親善關係を樹立す

(四)　目下戰火を被つてゐるビルマを荒廢より復興するため先づ治安の維持、民心の安定を計り極力民衆生活の安定を計る。

以上によつてみても、當面の中央行政機關の目標は、ビルマの戰火よりの復興と日本への協

力を中心にしてゐることが知られる。

かくしてビルマの軍政も飛躍的段階に入つた。

建設の息吹き　戰火の裏にすでに新生ビルマ建設の槌音はたかだかと鳴つてゐた。タイ領ピサンロークからラングーンまで七百キロの道路建設、千古斧鉞を入れぬ國境の峻嶮開拓部隊の勞苦については前にも述べたが、その後の道路應急修理作業も、すでに數千キロにおよんでゐる。ラングーン、マングレイ間、そしてマングレイからラシオまでの縱貫道路の橋梁の破壞は十四を數へたが、わが工兵隊の活躍とビルマ民衆の協力によつて、すでにこの道路上を日の丸の旗も勇ましいトラックが快適な疾走をはじめてゐる。

鐵道の修復は小人數の鐵道部隊が、しかも徒手空拳、すべてを現地資材に求めつつも、一月末モールメン占領によつて汽關車五輛を鹵獲したのを皮切りに、サルウィーン渡河の第一線部隊にこの機關車で追ひつき、部隊の輸送と軍需資材の輸送に大きな貢獻をなし、ラングーン攻略に拍車をかけたのである。

さらにラングーン、ラシオ間のビルマ鐵道も、五月下旬には全線開通し、五月三十日飯田最

高指揮官臨席のもとに、盛大な開通式を擧行し、ラングーン、ラシオ間九百キロ、かつての援蔣鐵路には興亞の直通列車が堂々と驀進し、その他各支線總計二千六百キロの鐵道は、完全に修復されたのである。これはビルマ鐵道總延長三千三百キロの八十パーセントであり、一日平均四十キロといふ驚異的修理速度さへみられたのだ。

鐵道・道路の修復とともに各地の治安は回復し、ラングーン放送局も堂々と放送を開始してゐる。

わが軍政當局はこの治安回復と併行して、醫療設備の改善、衞生思想の鼓吹に特に重點を置き、各地に防疫班を置き、傳染病の豫防注射の普及、藥品の無料配給等に不眠の活動を示し、このため戰爭直後の無秩序からくる不衞生に、加ふるに傳染病の猛威をふるふ雨季の到來にもかかはらず、傳染病がほとんど發生してゐないやうな狀態にある。

一方、ビルマ主要産物たる農産物の收穫については、半歲にわたる戰火の繼續にかかはらず皇軍の心あるはからひをもつて勤勉力行の範を垂れた結果、大體平年作の六割から八割くらゐまでを維持しうる見込みをつけうるにいたつてゐる。

戰火をのがれてゐたビルマ民衆も、ラングーン放送局から『家に歸れ』の放送をおこなつたのを機に、しかも皇軍の特別なはからひにより、無料サーヴィスの難民列車で、ぞくぞくとわが家に歸り、新生ビルマの生活設計に喜々としてたち働いてゐる。

＊　＊　＊

血と汗と涙の犧牲に綴られたビルマの悲史は終つた。アジアのビルマの輝かしい一頁はいま繰られたのである。

興るビルマの蔭に、崩れゆくものの姿はどうであらうか。

一　イギリス陣營の動搖

ホンコン、英領マレーそしていままたビルマの戰線で、イギリス軍は三度徹底的敗北を記錄した。

對日包圍陣の前衞基地ホンコンと中核基地シンガポールにおける慘めな降服は、ジョン・ブルの世界的信用の失墜であつたが、ビルマ戰線では降服する暇さへなかつただけに、より一そ

う悲慘であつた。インドと、そして聯合國重慶にも地つづきであるといふことは、イギリス軍に逃れ得るといふ希望をもたせた。

これがため彼等の鬪志は却つて鈍り、退路を求めて徒らにはてなき樹海をさまよひ、皇軍の包圍捕促に殲滅的打擊を受け、辛うじてインド國境を越え得たわづかの兵も、全くの身一つ、飢餓と疲勞に乞食同樣の姿をインド民衆の前に曝さなければならなかつたのである。インドの反英が侮英に變化してきたことは當然である。

ビルマ領内にはひつた皇軍破竹の進擊に、インド全民衆の獨立への氣運は最高潮に達するかに見えた。狼狽したチャーチル首相が、クリップス國璽尙書をインドに急派し、彼クリップスがニューデリーのウェリントン飛行場に到着したのは三月二十三日であつた。

しかし、敗戰に次ぐ敗戰をつづけてゐるイギリスの示した欺瞞策などは、アジア民族として目醒めつつあるインド民衆を憤らせるだけであつた。蔣介石を使つて怒れるこの巨象を宥めようとしたり、ルーズヴェルトに仲裁を依賴したりしたが無駄であつた。

この秋、蹶然たつた帝國海軍は、突如、アンダマン島を占領、ベンカル灣を睥睨するとみる

や、さらに四月五日、セイロン島コロンボ空襲にはじまり、九月同島ツリンコマリ軍港東南方洋上にイギリス空母ハーミスを擊沈する前後五日にわたるインド洋作戰を決行したのである。このインド洋作戰こそ、帝國がクリップスのたくらんだ英・印交渉にあたへた無言の警告だつたのだ。

帝國海軍の東インド洋制壓に英・印連絡を半身不髓にされたイギリスに、いま英領ビルマの崩壞といふ現實が大映しされた。

火災はいま隣室を燃えつくした。インド防衛は飛火の防止どころではない。類燒の危機にあるのである。

イギリス本國の武力輕視の空氣は、クリップスを迎へたインド國民會議派の對英態度が、過去の無抵抗主義から百八十度の轉向をなし、『イギリスはインドから手をひけ』といふはつきりした强硬要求のもとに、がつちりと結束しつつあることに明かにみとられた。

さらに、インドはビルマから年々四千五百萬ガロンの石油と、二百五十萬トンの米を輸入してゐたのである。このビルマへの依存性は、いまインドの生活に重大な影響をあたへてゐる。

このほかにも、製鐵製鋼、ことに、市場を濶歩してきた亜鉛工業などのインド國内産業――イギリス植民地の兵器廠――は、その原料の大部分をビルマに仰いでゐたのであるから、その痛手たるや相當なもので、インド・ビルマ國境からわづか八十キロ内外のアキャブ飛行場がわが軍の手にあり、わが荒鷲の空爆圏内に置かれたカルカッタ重工業地帯は混亂その極に達したのである。

しかも、ついこのあひだまでビルマはインドの一州の地位にあつたのであるから、インド民衆はもちろん、イギリス國民にあたへた心理的な打撃も看過し得ない。

ここに、さすがのクリップスもほどこすに術なく、四月十三日カラチ發で遂ひに退散した。事態はイギリスにとつて全く不利になつた。そして形勢非なりとみるや、イギリスはガンジー起草の對日交渉案なるものをでつちあげ、あたかもガンジー翁に樞軸國と通謀する意思があつたかの如きデマ宣傳をばらまき、自由主義的インド人の離反を策した。

しかし、ガンジー、ネール等を中心とする國民會議派の内部結束は意外にかたく、このイギリスの切り崩しの陰謀は、却つて逆效果を生み、英・印關係の惡化に油をそそいだ。

世界環視のうちに、八月七日ボンベイで開かれたインド國民會議全印委員會は、二日間にわたる白熱的討議の末、八日にいたり遂ひに壓倒的大多數で『イギリス政治勢力の即時インド撤退を要求する決議案』を通過させた。

この結果、ガンジー翁の指導下に不服從運動の開始は必至とみられるにいたつた。とみるやイギリスは突如先手を打つて大彈壓を敢行、九日早朝ガンジー、ネール、アザット等國民會議派運用委員の幹部をはじめ、全インド各地の反英要人數百名を一せいに檢擧した。

ガンジー逮捕の報ひとたび傳はるや、激昂せるインド民衆は、逮捕直前のガンジーの『余の屍を越えて進め』の言に從ひ、ボンベイ、ニューデリー、カルカッタをはじめ各地で示威運動を開始し、警察署、税務署、郵便局、鐵道、バス等を襲撃、警官隊、軍隊とも衝突していたるところに流血の惨事をみるにいたつた。

インドはいま反英暴動の坩堝の中に混亂してゐる。

一方ラングーン港を追はれたイギリス海軍は、セイロン島方面で奇襲を喰らひ、インド洋にも居堪れず、倉皇としてアフリカ方面に遁走した。そして例の弱い者いぢめの手でフランス領

植民地マダガスカル島に不法上陸した。彼の意圖するところはインド、重慶、ソ聯に對する補給路の確保、オーストラリアに對する連絡路の補強であつただらうが、このことは、イギリスがインド洋方面からアフリカ方面に退却する準備工作以外のなにものでもない。北アフリカの獨・伊軍の猛攻下にスエズの運命が口の端にのぼりつつあるとき、イギリスの極東艦隊はオーストラリアか南アフリカ以外に休息所とてあるまい。

そしてまた、すでにビルマの火がインドにつきはじてゐる時、インド・オーストラリア間の連絡など、たとへあつたところでオーストラリアが救はれる道理がない。ことに珊瑚海、ソロモン海において米・英聯合艦隊の主力が撃滅され、肝腎のマダガスカルさへ帝國海軍の攻撃を免れ得なかつたではないか。

英領ビルマの崩壞は、インドとオーストラリアの孤立を決定的なものにした。

そしてビルマ在住の百五十萬のインド人、彼等もいまインド獨立の尖兵として皇軍のもとに活動することになつたのである。

二　重慶の苦惱

前にも述べたやうに、蔣介石が虎の子の直系機械化部隊を國外に派したのは、ビルマ・ルート防衛と重慶政權の面目を賭したものであつた。そしていま、それを二つながら失つたのである。いま蔣介石は面目どころではない。御自慢の精鋭十萬が、英・印軍と枕をならべて討死してしまつたのだ。

今度の戰では、彼等も得意の退却戰術をもちゐる隙がなかつた。大陸の戰線と同じやうに放火と掠奪をおこなつたが、ビルマ人は自國民のやうに『沒法子』で引さがらなかつた。いたるところでビルマ人の反抗に遭つた。重慶軍にとつては全く勝手の違つた戰爭であつた。

兵器、彈藥、資材など莫大な損失を蒙り、重慶抗戰力の再編成さへほとんど不可能にされた蔣介石は、俄然居直つて、ビルマ遠征費をイギリスに要求し、ビルマ派遣重慶軍の諸經費、損失は當然イギリス政府が支辨すべきものであると强硬談判を開始したといふが、落目のイギリスが拂へるわけもなし、對日陣營の結束も、金錢づくになつて來ては先がみえてきたといふべ

きである。

ビルマ・ルートを失つた重慶が一番困つたのは、何といつても石油であらう。ガソリンなくして飛行機、戰車はおろか、重慶の一番大切なトラックが動かない。

イギリスがアジアに持つてゐた最後の油田であるイェナンヂョーンを中心としたイラワディ油田地帶が日本の手にはひつたのである。元來重慶の石油（ガソリン）は輸入先は蘭印、アメリカ、ソ聯であつたが、その中でも蘭印、アメリカはその八、九割を占めてゐた。

宋美齡同伴で蔣介石がビルマを訪れたのは、蘭印の全面的制壓とラングーンの失陷に困窮し、たあげく、イラワディ油田を確保するためでもあつたのだ。

木炭車の活用、桐油の增產、甘肅油田の開發などの計畫はいいが、資材は何處から手に入れるか。はたして重慶は、四月十五日中國運輸公司に對して、支那全體のバス運轉の中止令を出した。重慶の石油涸渴は深刻である。

次はやはり米である。ビルマの米がゆかなくなつた。重慶軍事委員會では早くも各戰區に對し、軍の糧食は現地で徵發すべし、中央はこれが補給をおこなはず、との命令を出してゐる。

いはば掠奪免許令のやうなものである。住民も可愛想であるが、軍隊も妙な取扱ひを受けることになつたものである。由來、支那の中央對地方軍の關係は金錢ならびに物資の補給關係で結ばれてゐたものである。

各戰區の軍隊の中央に對する紐帶の一つはここに切れたわけだ。地方軍の經濟的獨立は、地方軍閥跋扈の昔に歸ることになり、重慶の統制力の弱體化は必定であらう。

蔣介石夫妻は二月初旬、インド訪問の一ケ月の旅行をこころみた。その目的はインドの反英氣勢を、反日氣勢に振りむけんとするイギリス政府たつての賴みをはたさんためであると同時に、ビルマ・ルートに代るインドのアッサム・ルートの開發にあつた。

しかし、世界に有名なヒマラヤの天險を貫き、ベンガル州にはひるこのルートの開發は、未曾有の大土木工事であり、敗殘の重慶が戰爭の片手間にやるには荷が重すぎるし、かりにやれたとしても短い月日では開通できないだらう。しかしそのルート設計の中央部分に雲南省西部の膽越、ビルマの北邊のミッチナがはひつてゐたのであるから、その二つとも皇軍に占領されて現在この企畫もお流れであらう。

インドと重慶を結ぶ線にはビルマ作戰軍がこの深い楔を打ち込んでゐることを忘れてはならない。

ビルマ・ルートの喪失ではアメリカも悲觀してゐる。ラングーンを經ていままでアメリカに輸出されてゐた桐油、錫、絹、タングステンなどの重要輸出品の途が斷たれた。アメリカもかうなると重慶にこれまでのやうにたやすく金を貸せないであらうし、ちよつと飛行機以外に送れるものもないやうだ。

すでに重慶は米・英の對支援助の無力を暴露すると同時に、重慶軍の敗退は棚にあげて、英・印軍の意氣地なきを公言して、米・英の援助がこのまま無くなつてしまふならば、抗戰の前途は暗澹たるものがあると脅迫がましい悲鳴を米・英に投げつけてゐる。

三　作戰未だ終らず

ビルマ全土の戡定は成つた。西はインド、東は重慶、皇軍の進擊態勢も成つた。

帝國海軍のインド洋制壓と相俟ち、ビルマ作戰軍はインドにおけるイギリス勢力を睥睨するとともに、わが精鋭の怒江沿岸進出に、昆明、重慶は戰々兢々たるありさまである。

作戰はまだ終つてゐない。米・英と重慶とのあひだに、巨大な楔を打ち込んだビルマ作戰では、いま米・英・蔣の完全擊滅の作戰に突入してゐるのである。

はたしてビルマ方面軍の雲南省突入に呼應、浙江省金華を中心に蟠踞する敵第三戰區新編第九軍および第八十八軍に對し、浙東作戰は開始され、北支においては冀中地區共產軍擊滅の冀中作戰が展開され、山西、河北、河南三省の剿共を目指す晉冀豫省境作戰が決行され、さらに南支にあつても、敵第七戰區余漢謀麾下の第十二集團軍に對する新作戰が空陸呼應して開始された。

重慶擊滅への鐵槌は少しの緩みも見せてはゐないのである。

ビルマ作戰は大東亞諸作戰のうち、米・英・重慶の具體的紐帶を示すビルマ・ルートをふくんだ區域に戰はれ、英・印軍および蔣介石直系軍總勢十五萬を相手とした大作戰であり、それだけにマレー、蘭印、フィリッピン等における主軸作戰とはおのづから異なる困難があつた。

五ケ月にわたる大地上作戰と航空作戰、さらにこれを掩護する海軍部隊のベンガル灣、イン

ド洋作戰が戰はれ、そしてビルマは救はれ、大東亞の名譽ある戰友となつたのである。

動搖と苦悶のうちに餘喘をたもたんとするイギリスと重慶。知らず識らず陷つて行く崩壞への歩みは、緩やかなだけに彼ら自身氣づかぬでもあらう。

しかし重慶よ、イギリスよ、支那事變前および今次歐洲戰以前の自己と現在の姿とをみくらべてみるがよい。餘りの變化、驚くべき顚落に暗然たらざるを得ないであらう。

ビルマを挾む二つのアジア民族、重慶とインド。アジアの反逆者蔣介石とアジアの侵略者イギリスとのもとに苦難の途を歩むこの二つの民族に、われわれは一掬の涙なきを得ない。

しかし、暫くの辛抱である。皇軍は、そして母なるアジアは、必ずや救ひの手をさし延べるであらう。

（第九回大詔奉戴日に擱筆す）

感狀授與記

ここに掲げた感狀は昭和十七年十月十日現在までのものにして、その後同十月十三日次の如き陸軍省發表があつた。

陸軍省發表（十月十三日午後四時）　緬甸作戰に於て武功拔群なりし作間部隊同配屬部隊及び原田部隊同配屬部隊並びに平井部隊同配屬部隊に對し曩に同方面陸軍最高指揮官より夫々感狀を授與せられしが今般　畏くも上聞に達せられたり

加藤建夫少將

陸軍省發表（七月二十二日午後四時）

大東亞戰爭勃發以來戰鬪飛行部隊長として南方各地に轉戰し全戰局の歸趨に至大の貢獻をなせる故陸軍中佐加藤建夫生前の武功に對し曩に南方方面陸軍最高指揮官寺內壽一より感狀を授與せられしが今般　畏くも上聞に達せられたり

感　狀

陸軍中佐　加　藤　建　夫

右者戰鬪飛行部隊を率ゐ今次作戰に從ふや新裝備の戰鬪機を驅り常に陸軍航空部隊の先鋒となり遍く主要戰場に轉戰し果敢なる攻擊と卓技とを以て敵機二百數十を擊墜破し嚮ふ所悉く敵を慴伏せしめ戰局の歸趨に至大の貢獻をなせり、又此の間遠距離進攻に將又地上攻擊に戰

鬪機部隊の運用上幾多の新境地を開拓せり、部隊の赫々たる功績に關しては既に再度感狀を授與して顯彰するところありしが其の戰功は一に中佐の高邁なる人格と卓越せる指揮統帥及優秀なる操縱技能に負ふものにして其の存在は實に航空部隊の至寶たりしに遽かに壯烈なる戰死の報に接し痛惜極まりなし

茲に重ねて感狀を授與して特に拔群なる武功を賞し之を全軍に布告す

昭和十七年五月三十日

南方方面陸軍最高指揮官ノ

伯爵　寺　内　壽　一

略　歴

明治三十六年九月二十八日北海道上川郡東旭川村字上兵村に生れ、同四十三年四月旭川小學校を經て、大正六年には旭川中學校へ進んだ。同校に二年の一學期まで在學、志を達して大正七年九月仙臺陸軍幼年學校に入學、ついで陸軍士官學校に進み同十四年七月同校を卒業、同年十月步兵第二十五聯隊付、更に飛行第六聯隊付を經て、同十五年六月所澤陸軍飛行學校に操縱生として入校した。

同校においては、德川校長から「操縱ならびに射擊術は教官に劣らぬものあり」とのをりがみをつけられたほどに、技術に秀てゐた。

昭和二年五月同校を拔群の成績をもつて卒業、同五年三月陸軍士官學校本科生徒隊付、七年八月明野陸軍飛行學校教官を經て、同八年航空兵大尉に任官し、十年十二月には明野飛行學校下士官候補者隊長を兼任、翌年四月陸軍通信學校に將校として入校し、十二月には立川飛行場第五聯隊長となつた。

昭和十二年七月七日支那事變勃發するや、同月十九日に寺西部隊中隊長として勇躍北支の空に飛び、各地に轉戰して赫々たる武勳をたて、十三年三月二十六日寺内北支方面軍司令官から加藤部隊に、また同年四月二十九日德川（とくがは）航空兵團司令官から寺西部隊に感狀を授與され、同時に少佐に進級した。

昭和十四年三月陸大を卒業し、陸軍航空總監部兼陸軍航空本部部員となり、七月には寺内大將の隨員として獨・伊兩國を訪問、歸朝後も戰鬪飛行部隊長として廣東方面に出征した。

昭和十六年十二月、大東亞戰爭の勃發とともに、南の空を壓して出陣し、マレー、スマトラ、ジャワ作戰を經てビルマ作戰に參加し、數々の輝かしい武勳を樹て、その間、感狀を授與されること三たびにおよび、十七年三月には中佐に進級した。

同五月二十二日ビルマのアキャブ飛行場に來襲せる敵戰鬪機ブレンハイムを追ひみごとこれを擊墜したが、惜しや自らも火を發して壯烈な戰死をとげたのである。

＊　＊　＊

南方空の擊滅戰に赫々たる偉勳をあらはし、靑史に不滅の金字塔をうちたてて、去る五月二

十二日ビルマ戰線アキャブ附近で壯烈な戰死をとげた帝國陸軍航空の至寶、加藤建夫中佐にたいして寺内陸軍最高指揮官より、武人として榮譽このうへなき感狀を授與され、この旨畏くも上聞に達するの光榮に浴し、これとともに去る五月二十二日附をもつて二階級進級の恩命を拜し、諸般の手續完了をまつて、奇しくも少將の命日にあたる七月二十二日、陸軍省から前掲のごとく發表されたのである。

實に、少將の戰死こそ壯烈そのものであり、一億國民の痛惜おくあたはざるところである。

大東亞戰開戰劈頭、マレーへ上陸する山下兵團の船團航行泊地掩護に、南方特有の惡天候をものともせず、陸軍航空隊として空前かつ至難な任務を遂行し、よくわが方の作戰企圖を祕匿今次南方大作戰成功の礎をきづいたのである。

戰況の進展にともなつて、豪膽にもわが軍の占領いまだ確實でない危險な敵の飛行場に强行着陸して、そのつど基地を推進せしめ、つねに有利な態勢を持し、あるひはまた、爆擊隊に協力して、敵陣粉碎を容易ならしめ、地上部隊に協力して敵の抗戰意識を喪失せしめ、マレーにスマトラに、はたまたジャワ、ビルマに、そのたくましき鵬翼をはばたかせ、所在敵航空兵力

にたいし痛擊を加へ、皇軍戰鬪隊に必勝の信念を昂めしめるとともに、全軍の意氣昂揚に多大の貢獻をなしたのである。

この間、加藤少將の敵機擊墜數は二百數十機におよび、その武勳は屢次授與された感狀にあまねくつくされてゐる。

少將は、支那事變勃發以來、戰鬪隊長として勇躍出征し、北支にまた南支に、赫々たる勳功をたて、感狀を授與せられること實に七回におよんだが、同一部隊に七つの感狀授與はわが建軍以來の榮譽であり、さらに二階級昇進の恩命は、陸軍將校としてははじめである。

加藤少將の人格高邁なるは、部內はもとより、少將を知るすべての人の異口同音に讚へるところであつた。とくに、その卓越せる指揮統帥と優秀な戰鬪技能は、わが陸軍航空の至寶とうたはれ、まさに空の軍神として國民讚仰のまととなつた。その戰死たるやまことに痛惜きはまりなく、「空の軍神加藤」の偉大な功績をしのんで一億國民は世界最强の空軍建設を誓つたのである。

以下、軍神の足跡をたどつて輝く戰歷を記錄し、ともに軍神の偉大な勳功を偲び感謝をささ

げることとしよう。

京津地區上空の制壓　昭和十二年七月七日支那事變勃發して戰雲北支をおほひ時局重大化するや、加藤少將は部隊長として、七月十九日立川飛行場から勇躍征旅にのぼつたのである。

爾來昭和十二年十二月二十六日までに、青縣、雄縣、霸縣、蒼州、東廉、石家莊、拍鄕、順德、洛陽、太原、忻縣、邯鄲、磁縣、平山各地に進攻、あるときは敵飛行場その他軍事施設を强襲して甚大な損害をあたへ、あるときは敗走する敵軍を捕捉し、それに機銃掃射をおこなつてこれを殲滅し、あるひはまた、地上部隊と密接に協力して地上兵團の作戰指導に多大の寄與をなした。この間、加藤部隊の敵機擊墜數は二十數機にのぼつてゐる。

越えて翌昭和十三年の新春を迎へるや、加藤部隊の活動は日を逐うてめざましく、一月三十日には爆擊隊と協同して洛陽飛行場に進攻し、洛陽附近上空において敵戰鬪機と遭遇、彼我入りみだれて壯烈果敢な空中戰鬪を展開して敵機十二機を擊墜、加藤隊長自らも二機を擊墜したが、わが方もまた川井伍長を失つた。部下を思ふ加藤隊長の痛惜の念極りなく、翌三十一日、復仇のため惡天候を冒して再び洛陽に進攻したのであるが、すでに敵機は姿をあらはさず、加

藤隊長は無念の涙をのんで基地に歸還したのである。

ついで二月二十日、新鄉飛行場を前進基地として禹州、鄭州を攻撃、三月七日には敵機の西安附近集結を知り、翌八日重爆隊と共同して第一次西安攻撃を敢行した。しかし、この日は西安に敵影なく、歸途、華縣附近においてイー一五型四機を發見してこれを撃墜、つづいて十一日に第二次、十四日に第三次の攻撃を反復し、敵機五機を撃墜し去つたのである。

歸德上空の空中戰　三月十九日袞州に前進して徐州、陽山、歸德等に索敵、三月二十五日部隊長寺西小佐指揮のもとに第一次歸德攻撃を敢行した。

この日、加藤隊長は川原中尉以下四機を率ゐて主力に先行すること十五分、歸德飛行場に敵なきを見、八時五分飛行場上空を發して陽山方向に向ひ索敵前進、八時十五分陽山近くに敵イー一五型、八機の編隊群を發見し、五機をもつてこれを攻撃中、別の敵約十機の戰闘加入に遭ひ、約四倍の敵に對して不利な戰闘をまじへ、八時四十五分にいたる間勇戰奮闘をつづけたのであるが、この間、川原中尉が敵彈を受けて壯烈な戰死をとげ、關口曹長も戰傷したばかりか田中曹長は發動機に敵彈を受けて戰闘不可能におちいり戰列から離脱したので、齋藤曹長は田

中機を掩護のため臨城に同行して不時着、このやうな狀況のなかで加藤隊長は單機よく激闘をつづけてその四機を撃墜、合計十二機の敵機を屠つたのである。

しかし加藤隊長は、「本日敵機十二機を撃墜し得たりと雖も、われまた至寳ともいふべき川原中尉を失つたことは遺恨中の遺恨であつて、本日の獲物を以つてして到底償ひ得ない」と長嘆息、部下の戰死を痛惜する親鶯の心情は、きくものの胸をうつものがあつた。

四月九日、さらに第二次歸德攻撃、十日第三次攻撃を敢行して二十數機を撃墜、徹底的にこれを覆滅し去つたのである。

さらに五月二十日、周家口において五機を撃墜し、五月二十五日に命を受けて內地歸還となつたのであるが、この間昭和十二年九月から十三年一月末にいたる積極果敢なる加藤隊の活躍にたいし、同年三月二十六日、當時の北支方面最高指揮官寺內壽一大將から、

隊長以下基地勤務の將兵一致團結謀るに周到、動くや果敢克く我武威を宣揚し以て京津地方に對する敵の空襲企圖を銷磨せしめ得たるものにして、誠に戰闘飛行隊の精華と稱すべく其武勳拔群なり

と部隊感状を授與され、さらに四月二十九日、航空兵團司令官德川好敏中將から再び部隊感狀を授與され、重なる榮譽にかがやいた。

惡天候冒して船團掩護　今次南方作戰の一斷面を見れば、一大航空戰であり、したがつて加藤戰鬪部隊の功は實に大なるものがある。

昭和十六年十二月八日帝國の宣戰直前の七日早朝から加藤部隊は、佛印のフコク島飛行場を基地として青木部隊とともに、天候の不良を克服し、日沒後にいたるまで山下兵團マレー上陸部隊の第一次船團掩護に任じ、警戒の任を果すとともに、わが作戰企圖の祕匿に完璧を期し、陸軍航空部隊として空前にしてかつ至難な任務を完遂し、今次南方大作戰の赫々たる戰果の礎をきづいたのである。

加藤部隊長は、この任務の全く決死的であることを思ひ、部隊から比較的古參者〇〇名を選び、みづから指揮してこの重任を完遂せんと決心した。

當時船團は基地から〇〇キロ以上も離れ、また服務時間も相當長かつたので、加藤部隊長は二隊に分けて船團掩護にあたることとし、部隊長みづからは〇〇機を率ゐて敢然飛行場を出

發、暗黑咫尺をも辨ぜぬ時刻まで船團の上空に鵬翼をはつて掩護の任務を完全に果し、一路歸還の途についたが、全くの暗夜となり、しかもスコールに見舞はれ、文字通り一寸さきも見透すことができなくなつた。編隊は高度五十メートルないし百メートルといふ超低空で、海上をはふがごとく、計器を唯一の頼みに盲目飛行をつづけた。この難行をつづけるうちに、中島准尉機と都築曹長機の二機が行方不明となつたのである。

編隊はバンジャン島北方とおぼしき地點を通過したのち再び猛烈なスコールに遭ひ、しかたなく部隊長は西北方に向け反航し、雲上に出て再び東北方へと針路をかへ、あらゆる困苦を冒して漸く基地に歸還したが、基地に着く直前、第二編隊長高橋中尉を失つた。

この偉功にたいして、十二月十一日附をもつて寺内最高指揮官から感狀を授與され、戰史に燦たる一頁をのこしたのである。

シンゴラ飛行場に着陸　十二月八日いよいよ開戰となるや、北部マレー地區航空擊滅戰のため、部隊は長驅タイランド灣を越え、行動半徑の最大限にまで進攻し、ペナン、アェルタワル、スンゲイ、パタニーの各飛行場を攻擊し、よく十數機を擊墜破して、航空緒戰においても

赫々たる武勳をたてたのである。

部隊は、九日には友軍地上部隊の占領直後の、未だ補修ととのはざるシンゴラ飛行場に獨斷強行着陸して、これを基地となし本格的航空戰の態勢をととのへ、ペナン、クワンタン、タイピンの各飛行場攻撃に出撃したのである。

爾後戰局の發展にともなひ、部隊主力をもつてコタバルに前進、地上の友軍部隊と密接に協力し、あるひは重爆戰隊の掩護にも任じ、また、部隊單獨で敵地攻撃を續行し、文字通り席溫まるいとまもなかつた。

この間、イギリスがビルマに空軍勢力を增援し、わが後方攪亂を企圖せんとするを探知するや、二十五日に第一次ラングーン爆撃に參加して山本部隊を掩護し、敵の新鋭戰鬪機スピットファイヤー、ホーカーハリケン等二十數機と交戰し、大膽極りない戰法をもつてその十數機を撃墜、完全にラングーン上空を制壓したのである。

敵機四十六機を撃墜　一月十二日シンガポール航空撃滅戰が開始されるや、第一日に敵機四機を屠り、午後地上部隊のシンガポール攻略作戰に、部隊の主力をもつて參加し、二月上旬までに出動回數二十四回、撃墜機數四十六機の多數に達し、シンガポール地區敵空軍はほとんど潰滅され、シンガポール陷落の期を早めるにあづかつて力があつたと言ふべきである。

つづいて二月四日、部隊はカハンに前進し、同地を基地としてシンガポール地區の制空、重爆隊の掩護に任じてゐた。

落下傘部隊の掩護　二月六日よりスマトラ島パレンバン地區の航空撃滅戰が開始され、八日までの三日間に三十三機を撃墜し、二月十四日世界航空戰史に燦と輝く落下傘部隊の奇襲作戰決行を容易ならしめたのである。

すなはち、二月十四日落下傘部隊の奇襲が決行されるや、中尾戰鬪隊をあはせ指揮して久米部隊の掩護にあたつた。その間、加藤戰隊は敵飛行場方面に進攻し、小癪にもわが落下傘部隊の輸送機を攻撃せんとしたハリケーン、スピットファイヤー等の敵機を驅逐し、わが奇襲作戰を奏功せしめたのである。この輝く勳功によつて、二月十五日附で寺内南方方面陸軍最高指揮官から、根本作戰への協力部隊として再び感狀を授與されたのである。

二月十六日から、部隊は逐次パレンバンに前進して同地の防空に任じ、十九日からは部隊主

力をもつて西部ジャワの航空撃滅戰に參加、部隊全員は遠藤三郎部隊長のもとに生死をちかつて團結をかため、一撃必殺の信念に燃えて西部ジャワの各飛行場に進攻し、終始攻撃精神を發揮し、二十五日ごろまでには敵航空撃滅戰を終り、ひきつづき今村兵團の船團航行掩護にあたつた。

今村兵團の上陸開始にあたつては直接協力し、さらに敵機の活動を封鎖し、ジャワにおける制空權も獲得して、敵をして全面的降伏の有力な一因をなしたのである。

二月十九日から三月五日までの加藤部隊の戰果は、敵機二十九機を撃墜破してゐる。

この蘭印航空作戰を敢行し、敵の全面的降伏を誘致せしめた武功により、三月十二日蘭印方面陸軍航空部隊最高指揮官より感状を授與され、七月十八日に陸軍省からこの旨發表があつた。

壯烈なる最後　三月八日に部隊主力はスンゲイ、パタニーに前進し、十二日には北部スマトラ上陸船團の掩護に任じたが、ジャワ、スマトラ方面の作戰が一段落するや、部隊は反轉して主力をもつてタイ國に前進し、再びビルマ方面の敵に備へたのである。

三月二十五日の早朝、偵察隊の報告によりローウィン飛行場に敵機集結す、との報告に接し

たので、ただちに出動し、その四機を撃破、四月十日再び進攻して十四機を撃破し、さらに同日午後出動して殘存敵機トマホーク六機と交戰その二機を撃墜、このやつぎばやの奇襲、強襲により在ビルマのアメリカ義勇隊の主力を一擧に潰滅し去つたのである。

わが地上部隊の猛撃に敵空軍はアキャブに進出せりとの報に、四月五日加藤部隊長は〇〇機をもつて超低空によつて同飛行場を奇襲し、所在敵機を銃撃により撃破し、殘存イギリス空軍をほとんど潰滅せしめたのである。

わが軍のアキャブ占領後は、敵はわが軍の同飛行場使用を恐れてか、執拗に反撃來襲するので、これが邀撃の命くだるや、當時部隊中の空中勤務者は大部分デング熱に冒され、部隊長また病後の日なほ淺く健康十分でなかつたが、空中勤務者中の健康者全員を指揮して、十六日以後來襲する敵機の撃墜につとめ、二十一日までにロックヒード三機を撃墜したのである。

五月二十二日、敵のブレンハイム一機が來襲したので、加藤部隊長は間髪を容れず地上を蹴つた。怒れる荒鷲は一直線に必殺の意氣をもつて突進、アキャブ西北方約八十キロの海上で遂ひに敵機のとどめを刺したが、惜しや、部隊長の愛機は火を發し、部隊長もまた重傷を負ひ、

もはやこれまでと海中に自爆、壯烈極りなき戰死をとげたのである。

山本金吉中尉

陸軍省發表〔十月二日午後四時〕

緬甸航空作戰に武功拔群なりし陸軍中尉山本金吉及び吉岡飛行部隊並に比島、緬甸の航空作戰に偉勳を樹てたる本多飛行部隊に對し曩に緬甸方面陸軍航空部隊最高指揮官より夫々感狀を授與せられしが今般　畏くも上聞に達せられたり

感狀

吉岡飛行部隊陸軍中尉　山本金吉

右は昭和十七年一月二十八日ラングーン飛行場群攻擊に際し編隊長として之に參加しラングーン附近上空に於て優勢なる敵戰鬪機群と交戰するや進んで難に赴き身を挺して奮戰し幾度か克く中隊長の危急を救援せり

而して乗機敵彈を受けて空中戰鬪殆んど不能に陷るや剛毅不屈なる中尉は黑煙を曳きつつも敢然單機低くミンガラドン飛行場に突進し熾烈なる地上銃砲火を冒し在地敵機を索めて反復銃擊を加ふること實に七回敵爆擊機三機を炎上せしむ既にして彈丸盡き機も亦遂に火を發するに及び從容機と共に身を敵中に突入して壯烈なる自爆を遂げたり中尉の不屈不撓斃れて尙已まざる氣魄と鬪志とは實に我が陸軍戰鬪飛行隊精神の發露にして其の武功拔群なり仍て茲に感狀を授與す

昭和十七年五月十日

緬甸方面陸軍航空部隊最高指揮官

略歷

三重縣一志郡八知村の出身で、昭和九年三月縣立津中學を二年修了後、東京幼年學校に入校、昭和十五年に陸軍航空士官學校を卒業し、ただちに飛行部隊附となる。

*　*　*

昭和十七年一月下旬、ラングーン附近における敵空軍はわが航空部隊の連日にわたる猛擊にもかかはらず支那基地よりの補給によつてなほも積極的なる活動をつづけてゐた。一月二十八日午前の偵察によれば、ミンガラドン飛行場には小型大型とりまぜ約五十機の敵機をみとめた。この報を得て一擧殲滅すべく勇躍某基地を出動した荒鷲部隊がすなはち吉岡部隊であつてそのなかに山本金吉中尉の率ゐる編隊があつた。第一次攻擊は同日十三時五十五分ミンガラドン東北方十キロ、高度千五百メートルにおいて行はれ、敵戰鬪機二機を追ひ散らしたが、さらに十四時五分第二次攻擊に出動した山本中尉は、ミンガラドン西北方五キロの上空でトマホーク一機を發見、これを追擊し、つづいて突如後方から奇襲して來た一機をも反轉して擊墜し去つた。

なほも敵をもとめて高度四千メートルの薄雲層を突破し、敵機群のなかに壯烈な空中戰を演じ、かつ中隊長機と敵大型機との激鬪の渦中に突入してその危機を救つた。しかしながら中尉は連鬪の疲れを休めるいとまもなく、さらに執拗な挑戰を續行する敵機にたちむかひ、阿修羅のごとき奮戰をつづけたが、このとき不幸にも敵彈を受けて愛機は火を發しはじめたのであ

る。山本中尉は「よし、これまでだ」と自爆を決意し、敵飛行場の上空を超低空で七回も旋回し、地上にあつたブレンハイム爆撃機を三機まで銃撃を以つて炎上せしめ、「大日本帝國萬歳」を隊長機に報告するや從容自爆をとげたのであつた。

この鬼神をもなかしむる凄絶なる最期にはさすがの敵軍も驚嘆し、軍隊葬をもつてあつくその靈を弔つたといふ。

大平忠夫大尉

陸軍省發表〔五月十四日〕

ビルマ進攻以來偵察飛行中隊長として敵狀偵察に任じ以て同方面作戰に偉大なる貢獻をなし二月二十二日シッタン河上空に於て壯烈なる戰死を遂げたる陸軍大尉大平忠夫の拔群なる武功に對し曩きにビルマ方面陸軍航空部隊最高指揮官より感狀を授與されしが、今般　畏くも上聞に達せられたり

感狀

偵察飛行中隊長　大　平　忠　夫

右は偵察隊長として緬甸作戰開始以來常に自ら進みて難局に當り長驅天候氣象の障害を克服し且優勢なる敵戰鬪機の跳梁下を蘭貢附近を始め全緬甸敵航空狀況を具に偵察し適時適切なる

狀況を齎し航空部隊の航空擊滅戰指導に偉大なる貢獻を爲し又飯田兵團のモールメン攻略戰及シッタン河に向ふ作戰に方りては偵察の困難なる地上軍彼我の狀況を明かにし地上兵團の指揮連絡に任ずると共に密に爆擊隊に連絡して其の攻擊を容易ならしめ以て軍の作戰に寄與せる所甚大なり特に二月二十二日飯田兵團のシッタン河に向ふ進擊に方りては敵戰鬪機の跳梁下而も熾烈なる敵地上火力を冒し挺身自ら偵察機を驅り超低空を以て克く敵の退却方向を偵察し軍作戰指導を容易ならしめたが遂に敵彈を受け壯烈其の任務に斃れたり

以上の行動は終始熾烈なる責任觀念と率先難局に當るの氣慨とを以て不屈不撓克く萬難を排し自己の任務を完遂したるものにして其の武功は拔群なり

仍て茲に感狀を授與す

昭和十七年三月十日

ビルマ方面陸軍航空部隊最高指揮官

略歷

和歌山縣新宮市の出身、陸軍士官學校四十八期生である。昭和十一年十月、航空兵少尉に任官し、所澤飛行學校操縱學生を經て、十四年下志津飛行學校教官兼同校研究部員となる。四月に功五旭六を授與され、八月大尉に昇進した。

大東亞戰爭勃發するや、南方に勇飛し、十七年二月二十二日シッタン河上空にて戰死。

ビルマ作戰の初期、首都ラングーン攻略の直前、最も困難とする敵の退路偵察任務をみごと達成して惜しくも戰死した名偵察中隊長大平大尉のかつての上官であり、また常によき指導者としてつぶさにその才幹と人格を知り、みづからも五ケ月にわたるビルマ航空作戰に從軍して故大尉の壯烈な戰死狀況を知悉する佐藤正一少將は、名譽の感狀に輝く故大尉の殊勳と橫顏を偲びつつ次のごとく語つた。

大平大尉は開戰當初からビルマ方面にあつて、優秀な偵察隊長としてビルマ全土にわたる偵察にあたつてゐた。だいたい、偵察の任務は主として敵航空隊の狀況、飛行場、飛行機の配置等を搜索するのが建前であるが、當時兵力の關係で他の偵察機がなかつたので、神風と同じ型の非常に速度の早い偵察機で、困難な地上作戰の偵察まで一手に引受け、眞に部隊長の耳目と

なつて作戰指導に寄與したのである。

爆擊機、戰鬪機は時々整備をやり休憩するが、偵察隊は絕えず敵の動きを知つてゐなければならぬ關係上少しの休養もない。しかも地形は道路もない密林地帶に加ふるに南洋特有の惡天候である。そして偵察隊は他の爆擊隊や戰鬪隊とちがつて地味な仕事である。敵戰鬪機と戰鬪をまじへることも少くない。むしろ敵戰鬪機の眼をのがれて敵機の狀況を探す。敵は見つからぬやうに隱す。それをよく判斷して寫眞にとり報告する。といつたねばりが必要である。そこに偵察隊の特色があり、敵戰車何輛爆破、あるひは敵戰鬪機擊墜といつたはなばなしい戰果も常に偵察隊の活動によるものである。

大平大尉は以上のやうな困難な任務をよく遂行し大なる效果をあげた。○○にゐたときも、曇天でよく狀況が判らぬときも適時適切なる敵狀報告をおこなひ、ことに重要な偵察になるとみづから飛出し、率先陣頭に立つて指揮した。中隊長としては偵察任務のほかに隊員の世話、功績の報告、命令の授受など仕事が非常に多い。大平大尉はみづからこれを處理し、しかも重要な際はみづから飛出して有利な資料を提供したのである。あれほどの戰果をあげえたのは、

各部隊の作戰指導よろしきをえたのはもちろんであるが、その根本をなすものは大平大尉が適時適切なる情報を部隊長に報告、それによつて作戰指導が適切におこなはれた結果である。

偵察はだいたい○千メートルの高度からおこなつたのであるが、地上四○度といふラングーン邊の溫度も○千メートルの高度となると非常な冷寒で、毛の飛行服を着てゐてもふるへあがり、地上におりても三十分くらゐは身體があたたまらぬほどである。その寒さのなかを酸素吸入器をつけてビルマ全土にわたつて偵察任務を遂行した勞苦は筆舌につくしがたいものがある。

速力の早い偵察機で地上を偵察するのは實に困難だ。急行列車に乘つた際、電柱は數へられるが樹木を數へることはできないと同樣に、偵察機は速力が早いので地上の自動車の二、三輛は見つからない。高度が高ければ眼が十分とどかない。高度をさげれば速力が速いからなほ見つからないといふ困難がある。

通信筒はどこに落ちるかわからないので落せず、無線で地上部隊に連絡をとる。また同時に爆擊隊に知らせる。のみならず飛行場はたいへんな塵埃である。中隊長はみづから機體の手入

れもやらなければならぬ。

時日が經過するにつれて飛行機の數は少くなるが、それで廣範圍の捜索をやるためには綿密なる計畫をたてねばならぬ。またその補充のための〇〇との連絡をとるなど、獨立中隊であるから、すべてを中隊長みづから陣頭指揮し三面六臂の働きをしたのである。最後にはほとんど〇〇機しかなかつたが、「大丈夫か」とたづねると「いや大丈夫やります」と答へる。

〇〇でも偵察は大平大尉にまかせておけば心配はないといふほど信頼を得てゐた。

二月二十二日、地上部隊がラングーンを攻略する直前、敵がはたして北方マンダレイ方面に退却するかが問題になり、それによつて主力をいづれの方面に向けるかの、作戰指導上の重大な時機に直面した。このとき大平大尉は敵退却方向の偵察を命ぜられたのであるが、ちやうど新しくもらつた速度の遲い偵察機に乘り、部下が「一機では危險ですから編隊で……」といふのを「いや大丈夫」とシッタン河方面の敵狀偵察にむかつた。そのときは敵味方相對峙してゐたが、思ひきつた低空で敵彈のなかをかいくぐるやうにして數回敵の上空を偵察飛行し、ほぼ目的を達したとき、敵地上機關銃の猛射を受けて無念にもうしろに坐した搭乘者もろとも敵陣

にむかつて壯烈なる自爆をとげたのである。

要するに、大平大尉は偵察隊長としては常に困難なる任務をみづから陣頭に立つて指揮し、また地上にあつては中隊長としてあらゆる努力をはらつて機體の整備その他の任にあたり、惜しくも敵陣に散つたが、その活動は眞に模範的であり、また個人としても實に立派な人間であつた。その功感狀にあたひするものとしてその最高指揮官より集團としては第一回の感狀を授與されたのである。

戰死する四、五日前私の所に參り、「今度はかやうにしたらどうですか」と實に立派な意見を述べてゐた。「これはいい、しつかり賴むぞ」と別れたが、それが遂ひに最後となつた。考へるたびにまことに痛惜に堪へない。

吉岡洋部隊

感　狀

右は大東亞戰爭開始と共に長驅南部佛印に躍進せしが緬甸作戰となるや其の當初より之に參加し爾來終始積極果敢克く勁敵を擊破し航空擊滅戰に至大の貢獻を致すと共に各種の重要任務に服して常に赫々の戰果を擧げ開戰以來其の敵機を確實に擊墜破せるもの實に百十餘機に上り緬甸作戰全局に寄與せる所甚大にして其の武功拔群なり

仍て茲に感狀を授與す

昭和十七年六月十五日

緬甸方面陸軍航空部隊最高指揮官

吉岡飛行部隊

略　歷

吉岡洋部隊長は宮崎縣東臼杵郡南鄕村神門の出身で、陸軍士官學校卒業後、所澤陸軍飛行學校教官となり、昭和十三年北支派遣部隊附、日本飛行學校服務、航空總監部員などを經て、昭和十六年飛行部隊長として南方に派遣された。

＊　＊　＊

吉岡飛行部隊はタイ・ビルマ國境突破作戰、第一次ビルマ航空作戰、ラングーン攻略戰、第二次ビルマ航空作戰およびマンダレイ會戰などビルマ作戰全期間を通じて參加、常に縱橫の大活躍をなし「ビルマの荒鷲」とその名を謳はれた。

十月二十三日、ビルマ上空においてわが爆擊隊と協力し、敵トマホーク機と交戰その十四機を擊墜、また大膽なる對地攻擊を敢行し、猛火を冒して敵の大型機を四機まで炎上擊破した。

次いで二十八日、二十九日の兩日またも壯烈きはまる猛擊を反復飛行場に加へた。個人感狀に輝く山本金吉中尉をはじめ、わが機を敵機にぶつつけて壯烈華と散つた吉田佐一准尉などの、

最も勇猛な攻撃ぶりが敵の心膽を寒からしめたのである。二月六日、七日にはラングーン死守に活潑な補充をおこなひつつあつた敵空軍をいよいよ殲滅すべく出動し、果敢なる攻撃をおこなつて敵の反攻をゆるさなかつた。

このやうにして一月下旬から二月上旬にわたつて前後六回の攻撃が反復敢行されたのである。その間、わが方は數々の犧牲に加へて、補充は意のごとくならなかつたが、勇猛果敢なるわが航空部隊は常に優勢を持し多大の戰果をあげたのである。吉岡部隊の戰果は擊墜二十四、不確實十一、擊破炎上八であつて、敵空軍を全く慴伏せしめた。

さらに同部隊は地上作戰に直接協力して航空部隊の眞價を遺憾なく發揮したのである。

一月中旬、飯田兵團のタイ・ビルマ國境突破作戰に協力して、來襲せる敵地上部隊を攻擊して、同兵團のタヴォイ、モールメン方面への進出を容易ならしめ、またシッタン河からラングーンに向ふ作戰に協力しては果敢なる對地攻擊によつて敵を壓倒し、また左翼兵團のトンオク方面の追擊に緊密に協力した。また五月三十一日および六月一日の兩日は惡天候を冒して雲南驛飛行場を奇襲し所在の敵機十三機を全く擊破する偉功ををさめた。

本多三男部隊

感狀

本多飛行部隊

右は比島作戰に參加し遠く海洋を超えて進攻し開戰劈頭先づ克く先制急襲の功を收むると共に機を失せず基地を敵前に推進し適時其航空勢力の擡頭を破摧すると共に地上兵團主力の上陸及びマニラ作戰に緊密に協力し又各種搜索に多大の戰果を擧げたり

次で本年一月下旬泰及び緬甸方面に轉戰するや終始積極果敢航空擊滅戰に或は要地攻擊に或は地上兵團主力のラングーン及びマンダレイ作戰の協力に將又各種搜索に常に赫々たる戰果を擧げ比島作戰以來其の戰果の主要なるもののみを以ても實に擊墜破敵機百三十、擊破せる車輛類八百八十、船舶七十に上り比島及び緬甸作戰全局に寄與せる所甚大にして其の武功拔群なり

仍て玆に感狀を授與す

昭和十七年六月十五日

略歷

本多三男部隊長は長野縣下水內郡飯山町の出身で、縣立長野中學卒業後、陸軍士官學校および陸軍航空學校を經て陸軍大學を卒業した。大正十年シベリア派遣軍附として出征、歸還後も所澤陸軍飛行學校附、航空本部員、下志津陸軍飛行學校、歩兵學校、明野陸軍飛行學校の各教官を經て陸大兵學教官となつた。昭和十三年、飛行部隊幕僚としてノモンハン事件に參加し、さらに飛行部隊長、陸軍航空士官學校教官を歷任した。

＊　＊　＊

フィリッピン作戰に赫々たる武勳をたてた本多飛行部隊は突如ミンガラドン飛行場を急襲しつづいてバッセィン、雲南驛、マグウェ飛行場などに反復攻撃を加へ、敵を完膚なきまでにたたきのめした。その間五月一日までに敵にあたへた損害は、撃墜七、炎上および撃破せるもの約五十にのぼつた。

すなはち一月下旬より二月上旬にかけて、四回にわたるミンガラドンおよびレグー飛行場の夜間攻撃をおこなひ、また二月二十五日、六日の兩日にわたるラングーン爆撃に參加し、さらにミンガラドンを晝間爆撃して敵機撃墜十七(內不確實五)、炎上または直撃六、撃破二十一、計四十四の大戰果をあげ、滑走路、格納庫を壞滅せしめた。また一月二十一日には全力をもつてバッセィン南飛行場および埠頭を急襲し、敵の大型機七機を炎上させ、埠頭および倉庫群を破壞した。

ラングーン飛行場に潰滅的打撃を加へた後は、敵空軍の戰力培養基地の搜索を行つてゐたがその結果二月下旬にいたつて、敵空軍のマグウェ飛行場に約六十機が蝟集してゐるのを發見した。これを隱密裡に監視してゐたので、三月二十一日、二日の兩日に敢行された大航空撃滅戰に成功の端緒を開くことができた。

本多飛行部隊は地上部隊の前面の敵を攻撃する一方、敵の後方據點、軍需資材、舟艇等を爆

擊し敵に一大打擊を與へて、飯田部隊の作戰に寄與するところが多大であつた。一月下旬以來五月二十日に收めた戰果をみても炎上または擊破せる自動車三百九十四輛、同貨車千餘輛、擊沈せる船舶二隻、炎上せる船舶十四隻、擊破せる船舶十隻、炎上せしめた倉庫十餘棟、炎上せる市街四十數ヶ所、同兵舍六棟、同陣地四ヶ所にのぼつてゐる。

すなはち二月八日マルタバン攻擊以來飯田部隊がシッタン河を渡河し、いよいよラングーンに怒濤のごとき作戰を開始するや、本多飛行部隊はただちにペグーの敵據點を粉碎、擊滅し、或ひはトーングー方面より南下する敵の企圖を破碎するなど、ラングーン攻略のため大なる貢獻をするところがあつた。また地上飯田部隊がラングーン攻略後北進を開始するに當つてはニューアンレビン、トーングー、ピンマナ、ヤメティン等の敵重要據點攻擊によく協力して同部隊の進擊を容易ならしめ、敵の退却を捕捉するなどさまざまの大戰果ををさめた。

戰況日誌

ビルマ作戰

昭和一六年

一二月八日　米・英に宣戰の大詔渙發さる。
タイ國領無血進駐開始、ヴィクトリア攻擊先遣部隊チュンポーンに上陸す。

一二月一三日　陸鷲ヴィクトリアおよびタヴォイ、マグイの各飛行場を急襲す。

一二月一三日　先遣部隊クラ河を渡河ビルマ領に第一歩を印す。

一二月一四日　ヴィクトリア・ポイントならびにヴィクトリア飛行場に突入す。

一二月二三日　陸鷲第一次ならびに第二次ラングーン大空襲を敢行す。

一二月二五日　陸鷲第三次ラングーン大空襲を決行す。

昭和一七年

一月四日　タヴォイ攻略部隊タイ・ビルマ國境を突破進擊を開始す。

一月一七日　カゥメイダン陣地攻略。

一月一九日　タヴォイ市街に突入。

一月二〇日　ビルマ作戰軍主力サウンギン河を渡河、ビルマ領内に殺到す。

一月二二日　シャン山系の突破成功、先遣部隊カウカレイ平地に進出。

一月二二日　ビルマ作戰軍最高指揮官ビルマ民衆に對し聲明を發す。

一月二三日　陸鷲大擧ラングーン市ならびにミンガラドン飛行場を襲擊す。

一月二四日　前日に引きつづきラングーン市、ミンガラドン飛行場を爆擊す。

一月二六日　第一次航空作戰開始。
またもラングーンを大空襲す。

一月二八日　モールメン總攻撃開始。
一月三一日　モールメン完全占領。
二月　一日　陸軍航空部隊モールメン飛行場に進駐す。
二月　三日　第二次航空作戰開始。
二月　四日　ペアン完全占領。
二月　八日　サルウィーン河敵前渡河開始。
二月一〇日　マルタバンに突入これを占領す。
二月一一日　ラングーン攻略開始さる。
二月一五日　タトーンを無血占領す。
二月一六日　ビリン河を强行渡河す。
二月一九日　第三次航空作戰開始。
　　マンダレイを初爆撃す。
二月二三日　シッタン河東岸の包圍殲滅戰完了す
二月二六日　シッタン河敵前渡河開始、主力部隊進路を南方に大轉回す。
三月　三日　地上先遣部隊ビルマ鐵道に達し援蔣ルートを遮斷す。
三月　四日　ペヤヂ占領。
三月　五日　ペグー攻防開始。
三月　七日　ペグー市に突入。
　　ラングーン總攻撃開始。
三月　八日　首都ラングーンに突入す。
三月一〇日　ラングーン占領部隊北上を開始す。
三月一一日　ダイク北方地區で約千五百の敵を撃破す。
三月一三日　ラングーン入城。
三月一五日　增援部隊、ラングーン地區に集結完了。
三月一七日　(中央)チァウタカ占領。
三月一八日　(左翼)レパダムに進出。
三月一九日　(中央)ピューに突入。
三月二一日　マグウェの航空撃滅戰開始。
三月二三日　(左翼)バッセィンを占領。
　　帝國海軍部隊アンダマン島攻略。
三月二五日　帝國海軍部隊ラングーン内港に堂々進駐す。
　　(中央)トーングー總攻撃開始。

三月二八日　(左翼)プローム南方二十五キロの地點でアメリカ義勇軍を潰滅す。
三月三〇日　(中央)トーングー占領。
　　右翼突破部隊進撃開始。
四月　一日　(左翼)シュウェドーン占領。
四月　五日　(左翼)プローム占領。
　　海軍部隊、セイロン島コロンボ大空襲。インド洋作戰開始。
四月　六日　(左翼)アランミョーの敵潰走す。
四月　七日　(中央)イェダシェ占領。
四月　九日　セイロン島ツリンコマリ軍港沖合の洋上撃滅戰においてイギリス空母ハーミス以下を撃沈す。
四月一〇日　(右翼)ケマピュ占領。
　　(中央)スワを占領。
四月一二日　(中央)サガヤ占領。
　　(左翼)ザドダン占領。
四月一五日　(左翼)マグウェ對岸、ミンブに敵前上陸す。
四月一七日　(左翼)マグウェを占領。
　　(右翼)ザヤット奪取。
四月一九日　(中央)ピンマナおよび附近の掃蕩完了。
　　(左翼)イェナンヂョーン附近の殲滅戰終了。
四月二〇日　(右翼)ロイコーを占領し飛行場を確保す。
四月二二日　(左翼)ホポン占領。
四月二三日　(右翼)ロイレムに突入。
四月二四日　(右翼)ライカを確保。
四月二五日　(中央)ピョーブエ占領。
四月二六日　(中央)マンダレイ北方百キロのタヂを占領。
四月二九日　(右翼)ラシオに突入。
四月三〇日　(中央)イラワディ支流を渡河。
五月　一日　(中央)マンダレイに突入。
　　(右翼)センウィ占領。
五月　二日　(左翼)モーンイワ完全占領。

五月　三日　（右翼）ナムカム占領、バモに突入す。
五月　四日　アキャブ飛行場占領。
（右翼）緬・支國境を突破す。
五月　五日　（右翼）龍陵占領。惠通橋に達す。
五月　六日　（左翼）イェウ占領。
五月　七日　（左翼）マンダレイ・ミッチナ鐵道に達す。
五月　八日　（右翼）ミッチナ占領。
五月　一〇日　騰越を占領。
五月　一一日　ビルマ方面軍最高指揮官ならびにインド洋作戰海軍司令官に對し勅語を賜はる。
五月　一三日　（左翼）カレワの大殲滅戰終了。
五月　一四日　（中央）カタを占領。
六月　四日　ビルマに軍政施行の布告發せらる。

『大東亞戰史　ビルマ作戰』
定價　一圓

昭和十七年十月二十八日初版印刷
昭和十七年十一月一日初版發行　【五〇〇〇部】

編纂兼發行人　社團法人　同盟通信社
代表者　杉田才一
東京市芝區田村町四ノ二

印刷者　青野仙吉
東京市麴町區日比谷公園二番
【東東一〇三】

發行所　社團法人　同盟通信社

（承認協文出270132）

不許複製

營業所　東京市京橋區銀座西七丁目三番地　社團法人　同盟通信社出版部
電話銀座（57）七〇一一―五
振替口座東京三五八〇〇番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

（日本出版文化協會會員番號 220008）

古書肆 梁山泊
梅田・阪急古書のまち
TEL 374－2582

300

大東亞戰史四部作

陸軍省企畫

同盟通信社編纂
ビルマ作戰

讀賣新聞社編纂
比島作戰

朝日新聞社編纂
マレー作戰

東京日日新聞社編纂
ジャワ作戰

各冊共・價一圓（送料十錢）

同盟通信社・朝日新聞社
東京日日新聞社・讀賣新聞社

¥1.00